教の華嚴宗と小乘教の律宗との六宗昌隆せり。

南都六宗――三論宗と成實宗　三論は權大乘、成實は小乘なれど共教義は共に空宗に立つ。三論宗は論部の「中觀論」「十二門論」(共に龍樹の造)「百論」(提婆の造)此三部の論を所依として成る。成實宗の所依論は、成實論(訶梨跋摩造)なり。

一代佛教各宗は悉く釋迦牟尼佛が應病與藥的に說かれたるにて優劣なしとなす處に三論宗の要旨あり。故に一部一經に依らず大乘通申の論たる三つの論に依る。三經の內百論は世、出世の一切の邪を破し、世、出世の一切の正を通申し、中觀論は大小二乘の迷を破して大小兩教を通申し、十二門論は更に大乘を執するの迷をも破して大乘教の極意を申ぶるものなりとす。此宗二藏三轉法輪を立てゝ教判をなし、大小乘別ると雖その根本眞理は一つなりとし、大小通申の論たる三を取りて自宗の所依とす。

三論宗の教理は眞俗二諦と、八不中道と破邪顯正とを大綱とす。破邪顯正を先とし、邪を破すれば正顯はると說くもの本宗の主要なり。邪の教論の依つて來る所は非有非空中道の信仰なり。佛教の極意は有にもあらず無にもあらじ、故に佛教中にても何れかに執するものは破斥せざるべからずとなす。而して此信仰、顯正の教論的順序として眞俗二諦より說き出す。俗諦は萬法の差別の相を明にし第一義の眞諦には空と示す(此處成實に似たり)。併し有にあらず無にあらざる中道が眞理なり。眞實諦は言語を絕ち思想を離れたるものなるが故に、之を有空の二執を破したる八不中道と云ふ。能く此八不の正觀を凝らせば迷雲散じて明月顯はるゝが如く、實相顯現す。中論に「不生不滅不斷不常不一亦不異不來亦不去能此因緣を說き善く諸の戲論を滅す。我稽首して佛を禮するは諸說の中第一なれば」と。同じく權大乘と云ふも法相は阿賴耶識を說きて諸法緣起の相を明にし、三論は直ちに八不を立てゝ實相を說く。法相は時間的に說く緣起論三論は空間的に說く實相論なり。

成實宗の要旨は世界門と第一義門とを立て、世界門即ち差別迷誤の見地より見れば人我及び諸法は有なりと雖、第一義門即ち開悟の信仰よりは實のものならずして假なり。即ち人法皆空なりと說く。而して四諦十二因緣を說き業感緣起論なり。斯く人法皆空なるに、凡夫、諸有に迷執して生死に流轉し、苦を受けて出離の

期なし。去れど此我法二空の旨を了悟し修觀すれば、即ち一切の煩惱自ら治せられ涅槃を得と敎ふるなり。成實宗は法體恒有と說く俱舍宗と小乘中の有空一對なり。

三論宗は論藏の上に立つが故に其積極的意味即ち宗敎的內容は、顯正すべき眞實相即ち敎論が派生せられたる宗敎的信仰に存すること論部の性質なり。即ち論宗も其の立場は元より信仰なり。佛敎の敎理は本來悉く實驗的意味より成れる實際的意味のものなると斷言せらる。權大乘たる三論が小乘たる成實を其敎義の外形に執さば偏空及び迷見なしとなす所以味ふべきならむ。

法相宗と俱舍宗　兩宗の敎義は大小乘の別あるも同轍の論旨に立つ。法相宗は廣くは「唯識論」中に於ける六經十一論を所依として成ると雖特に「瑜伽論」「唯識論」に依りて立せらる。俱舍宗は「阿毘達磨俱舍論」を所依とす。「俱舍論」は釋尊所說の四「阿含經」を基本として世親の作れるものにして我究法有論に立つ。

史的研究に便する爲め俱舍宗の敎義より觀察せん。俱舍宗の敎義は成實と同じく小乘敎なるが故に、四諦三法印を出でずして四諦實有を眞理となす。去れど兩

宗の相異る處亦少なからず。其相異の要點は、俱舍宗は我、空、法、有、論にして成實宗は我、法、二、空、論なるにあり俱舍宗の要旨は三世實有法體恒有と觀じ、萬法を客觀的に解釋して五位とし又これを細分して七十五法となし、更に主觀的に分析して五蘊十二處十八界となす。吾人は煩惱に依り、是等諸法の因緣に依りて業を作り、業に依りて生死輪廻す。故に煩惱より解脫せずんばあるべからず。惱煩を斷たば諸業を造らず、故に死して再び輪廻せず。これ即ち入涅槃なりとす。要するに諸法を解釋するに七十五法に依り、四諦の理を觀じて滅諦即涅槃を得るを宗致とす。而して滅諦に入るの道は戒、定、慧の三學を修するにあり。有爲無爲七十五法につきては「七十五法名目」に說かる。七十五法は俱舍論の諸法觀にして四諦の敎論なり。佛敎の諸法觀は常に單なる萬有の哲學的解釋ならで、必ず宗敎的實際的意味のものなり。小乘俱舍の一步進めるが大乘の法相なり。

法相宗の敎義の要旨は唯識所變の理を觀じ、中道の眞理を見證し、涅槃の大果を得るにあり。有、空、中の三時を以て敎相を判釋し、遍(諸法に對し凡夫の見る處)依(諸法の差別的現象)圓(諸法の實相)の三性を以て信仰を明にす。諸法多なるも之を約

すれば五位百法に外ならず。依性即依他起性に就きて心王、心所を說き、以て萬法唯識の旨を立す。即ち萬法の信仰的解釋より進んで有爲無爲一切を宗教的唯心論的に說く。さて萬法唯識なるが故に吾人は深く唯識の旨を悟了し、眞如の妙境界に達せざるべからず。

華嚴宗　一代佛教も經律論の三藏を出てず。他の諸宗、多くは經藏若くは論藏によりて宗教を立て、獨り律宗は律藏に依る。經部に依るものを經宗と云ひ論部に依るものを論宗と云ふ。奈良朝佛教中經宗にして而も實大乘教に屬するもの此華嚴宗なり。

華嚴宗は南都佛教中其教義最も深遠なり。教相を判釋して五教、十宗とし、四法海の目を以て各種の教義を分ち、自家の教義は事々無碍法界にありとし、事々無碍法界を說くに十玄六相の目を以てす。これ華嚴宗教義の綱領なり。眞如實相は絕對一實にして不二無別なり。故に理體と事象とは互に交涉して其間毫も境界線なし。去れば亦事象も彼此交涉し事々無碍ならざるべらず。事々無碍にして物に融通すれば一物は即ち萬物にして萬行は一行に同融す。一行即一切行なる故又

必ず一位即一切位なり。故に頓圓數に依りて法界緣起の旨を觀じ行くことを勤むべく、以て成佛得道するを得べし。これ華嚴宗の要旨なり。さて圓教とは、眞如の實相と諸法との事に無碍法界即三界唯心染淨同體にして又無性の一心たるものを以て本となすものなり。即ちかの經文に「若し人三世一切の佛を了知せんとせば、應に法界の性にして一切唯心造なるを觀ずべし」或は「心佛及衆生是三無差別」等と說ける其意なり。此心自ら無性と知らざるを無明又は惑と稱す。惑に依りて業を作り、業に依りて報を受け、生死に流轉す。然るに緣に遇ひて此心自ら無性なりと知るを眞智又は覺と名づく。覺に依止し即ち圓教に依り、法界緣起の旨を觀じて作る所の業を菩薩の行と名づく。此行終に功を積み無始の妄執盡き、本覺の體に契ふを果滿の位と名づく。

律宗　本邦所傳の律宗は四分律の南山宗なり。本宗の所依は「四分律」六十一卷なり。四分律はもと小乘戒なり。南山宗は大乘の教理を應用して小乘律を解釋せし者なり。本宗の大意は遮惡持善、滅罪生善を宗とす。佛教には眞智を開發して無明を解脫せしむる化教即ち經論に說かるゝものと、惡業を止め善行を修せしむる

制敎、儀式即ち律藏に示さるゝものとの二法ありと見る。故に大乘家も戒法を受持して定慧二學と共に修すべしとす。南山派の祖道宣律師は大乘の敎理を以て「四分律」の小乘戒を解釋し、大乘戒たらしめんが爲め化敎制敎共に三段の階級あれど、大乘敎の深旨を以て見れば小乘式も大乘の戒律となるとなす。さて律宗敎義は五戒(不殺生、不偸盜、不邪婬、不妄語、不飲酒)八戒、六法(殺生蓄生、盜三錢、摩觸、小妄語、飲酒、非時食)十戒、二百五十戒を法の如く受持せしめ、受戒の多少と前後に依りて等級を定む。此時代の高僧等學德兼備にして、法を傳ふるに熱心に險を冒して諸國を巡歷し、山を截り橋を架しなどして道を通じ又は荒蕪を墾き貧民を恤む等以外にも庶民を化益せり。行基の如き其尤なるものにして、常に南無阿彌陀佛の名號を高唱しつゝ諸國を巡化せり。天平十七年初めて大僧正の官を受け、次て天皇、皇后、皇太后も行基を戒師として出家す。聖武孝謙の朝佛敎は實に宮廷の思想を左右し、加持祚禱等の儀式全盛を極め、戒律行はれ、聖武以後天皇の施政も戒律の旨に依り慈悲の根本觀念より民の生命を安からしむるにありとせらる。佛敎、神儒兩敎にも影響を及ぼす山王唯一神道、兩部神道出でゝ勢力あり。孝謙天皇

天平寶宇中僧願滿初めて鹿島社に神宮寺を建てしより以後、大社の側に神宮寺建てらる。崇神思想漸く佛敎の中に攝せらる。聖武孝謙の二朝は奈良朝佛敎の極盛期にして、宮廷的宗敎隆盛を極め僧侶勢力を得しより、僧にして政治上に干涉するものを生じ、遂に墮落に赴き信仰形式化しては道鏡、稱德天皇より法王の稱を授けられ、終に王位を窺ふが如きを生ぜり。

當代佛敎の中心——奈良朝時代には美術に於ける如く佛敎も既に多少日本化され來り、宗派種々ありたるも要は現世には國家太平、國土安穩ならんこと、未來には極樂淨土に往生せんとを希ふにありき。初めは朝廷一面、佛敎を外交內治の政略としたる觀あれど、奈良朝は國家的佛敎政治行はれたる時代なり。聖武孝謙朝の頃、佛敎の中心には確に信仰の生命活き、光明皇后等に依りて現はる。大佛は皇室の御本尊にて東大寺は帝室の總氏寺の如き觀あり。奈良朝に至るまで我國の佛敎は皆朝廷の保護の下にありて其大勢、都市佛敎とも云ふべく、都又は其附近に寺院建てられ其附近に傳布せられたり。大化改新前後の氣運を繼けたる草創時代の佛敎は、其外形に於て亦信仰に於ても自ら斯くの如き形式ならざるべ

からざりしなり。聖武天皇を始め、代々佛事を盛にし奈良七大寺も多く此際に成り、從つて工藝美術長足の進歩をなせり。

儒學の奬勵――眞備、釋奠の儀を定め儒學の普及を計りたるより、奈良朝の佛教興隆期に當りて儒學亦隆盛の緒を開き、吉備眞備は後世儒教の祖と稱せらる。孝謙天皇の御代には每戸孝經一本を撒すべき命下る。大學國學の外私學も少なからず建てらる。明經博士、明法博士、文章博士等の學官置かる。儒學を教授し釋奠の儀式を行ひ、儒教漸く宗教的形式を成すに至れり。去れど未だ後世の儒教の準備期たりしに過ぎず。

斯く奈良朝時代には漢學も奬勵せられ文學亦漸く盛となり、修史事業起り、「古事記」「日本書記」の史類をはじめ地方誌「風土記」出づ。萬葉假名出て自由に和語を寫し「萬葉和歌集」成り、神々に申す祝詞も撰錄せらる。又宣命あり。此時代のものは原文のまゝ續日本紀に傳はれり。佛儒神三教の技藝文學若くは社會に於ける影響漸く多く、斯くて奈良朝に於て美術工藝文學等の文化、社會の上層に於て主に宗教に基づきて起りぬ。

佛教南都に昌隆せる時に當り、地方民間には怪しき迷信風をなせり。是等迷信中の最なるものは役小角を祖とせる修驗道(山伏)なり。

政教混淆の弊――代々の天皇造寺を盛にし文化を移すに急にして、國力漸く疲弊し政教混淆の惡弊行はる。朝廷迷信に流れ、又文化の餘弊として奈良朝に文弱既に其端を開けり。稱德天皇の御代に至りて天下倦疲弊し、國家的佛教政治の弊極に達し改革の止むを得ざることゝなれり。これにつき竊に企畫したる人々は藤原良繼、藤原百川を中心とせる二派なり。

(八) 平安朝の宗教

平安遷都と佛教の新氣運――奈良朝の末光仁天皇は、聖武孝謙の朝以來此政教混淆の弊あり宗教を濫り、又朝廷及び人民が迷信の弊害いよ〳〵多きを矯めんと努め給ひぬ。當時僧尼の多くは皇室貴紳の尊敬と保護の厚きに慣れて日に墮落したり。この時に當りて中央の叡主桓武天皇の平安遷都あり。これ主に腐敗せる平城京を去りて面目を一新せん爲めなり。政治の中心を遠に北に轉ずると同時に秕政を革め、萎微せる神道を具し、神祇の制を定めたり。斯くて南部佛教は外

面上大に打擊を蒙れるも、政治の中心移れると共に佛教は宮廷と政治よりの獨立を得、宗教界の內より新宗教の要求は起りぬ。從來の南都佛教の宗義は、一方に祖先傳來の敬神思想ありて國民これを離るゝと能ざるより未だ國民一般の信仰となるに至らざりき。然るに桓武天皇の御代の末に至り、佛教界に最澄(傳教大師)と空海(弘法大師)の二大偉人出現し、各〻特色ある新宗教を開きて隆を極め、南都佛教に打擊を與へ宗教史上に一新紀元を開く。兩師の傳は群書類從續群書類從及び扶桑略記、元亨釋書等に依りて探ね得らる。

天台、眞言二宗の開立——桓武帝延曆廿三年最澄入唐求法の勅を受け、遣唐使に從ひ入京し空海も亦此行に加はる。最澄、翌廿四年歸京し請來せる天台密經の諸經を奉れり。其請來目錄は今も叡山に藏せらる。朝廷奈良七大寺に命じて請來の經論を寫さしめ、高尾の道場に諸寺の僧を會して灌頂三摩耶戒を受けしむ。次いで傳教比叡山延曆寺に入り、天台宗を開き三諦圓融の教を宣布す。斯くて天台法華宗は大乘の一宗として南都佛教と稱せり。最澄比叡山を開くに當り在來鎭座せる大山咋神を山王權現と仰ぎ一實神道を成せり。弘仁十三年最澄上表して圓

宗大乘戒壇の獨立を請ひしも、南都極力反對し最澄允許を得る能はずして同十三年六月四日入寂す。淳和天皇天長五年に至り戒壇院の勅許を得たり。延曆寺建ちて從來の三戒壇東大寺、下野藥師寺、筑前觀世音寺)に一戒壇を加へ、東大と延曆二寺隆盛を極む。天台宗は後正曆四年延曆、園城(三井寺)二派に分れたり。

弘法は青龍寺の惠果阿闍梨につきて眞言の秘藏を受け、最澄より一年後れて歸朝し、高雄の神護寺に入りて眞言の宗祖となる。以後天台と兩宗新都に淸新なる宗教思想を鼓吹し凡そ四百年間隆盛を致す。大師先づ神護寺にて傳法灌頂、結緣灌頂を行ひ、傳教大師亦弘法より灌頂を受け兩師の間親密なりき。空海弘仁四年初めて宮中に即身成佛義を唱へて諸宗の碩德を服せしむ。弘仁十四年京都東寺を賜ひ、號を下して教王護國寺と云ふ。仁明天皇の御代に奏請して宮中に眞言院を置き、爾後宮中の修法は天台眞言の二宗に歸す。弘法紀州高野山に金剛峰寺を建て鎭護國家の道場となせり。弘法大師は亦眞言秘教の旨より幽玄なる兩部神道說を組織し、嵯峨天皇の叡感少からざりきと。爾來神號と佛菩薩との名と互に混同せらる。弘法一世の行化大にして民間にも及べり。弘法の滅後、密教愈〻盛なり。

後事相卽ち儀式、方術の上に廣澤流と小野流(眞言宗修驗道)との二分派を生じ更に各、六派を分つ。陽成天皇宗叡僧正に依りて落飾受灌し給ふに至りて、天台初め奈良六宗皆密教の下に伏し、眞言宗は平安朝三百年間の佛教を支配せり。普敎大師覺鐵より敎相上の分派始まり、紀州根來寺に於て高野山の古義に對し新義を唱ふ。弘法大師の事蹟は宗敎以外にも多く、書道に關する功蹟は其最なるものなり。斯くて傳敎弘法は平安朝初期の文明史を飾れり。

道敎に就きて――道敎は儒佛渡來の頃より儒書と共に傳へられたるものなるべく、既に聖德太子「維摩經疏」中に老子の語を引用したり。去れど道敎は世に著はるゝに至らず。空海の「三敎指歸」に於て初めて道敎の名目表はれ、佛儒と配して其要旨たる無爲觀の意を發揮され、佛敎三敎の歸着とせらる。空海の後には菅原道眞これを味ひ以後少數の僧亦老莊の書を讀みて其風を傳へ、更に德川時代文敎興隆に伴ひて道敎を學習しこれを重んじたる學者有りたるも、其敎旨我民情に合し難く、わが國に於ては道敎として獨立に一つの形を成すに至らずして消えぬ。それがわが宗敎史上に如何に解せられ乃至攝せられ調和せられたるか

の痕につきても此小編に於ては叙述の遑なし。

天台宗と山王一實神道の敎旨――支那智者大師の天台宗は觀法卽ち知的信仰の理想として釋尊一代の敎法上に、一念三千三論圓融の觀卽ち所謂法華圓敎の敎旨たる宗敎的經驗を認む。一念三千とは染淨一切の法卽ち三千の諸法が衆生一念の心性に本具なるとなり。卽ち「法華經」の方便品に「唯佛與佛乃能究盡諸法實相」等と說ける之なり。此一念三千の觀を修するに空假中の三諦あり。空諦は三千の諸法を空なりと觀じ、假諦は之を有なりと觀じ、中諦は非有非空と觀じ、三諦は相互に相破するも而も宛然として存し(雙遮雙照し)圓融無碍不可思議なり。之を三諦圓融と云ふ。一念三千三諦圓融の理はこれ眞如法界の實相卽佛性なり。而して一念三千の觀は三諦圓融にあり。衆生此三諦圓融一如の觀を得ざる故生死に輪廻せり。三千圓融の觀を凝らし一念三千の理を觀じ以て一念に三千圓滿して缺けざる諸法、實相、煩惱卽菩提、生死卽涅槃、卽身成佛の妙境に入らんと、卽ち圓敎の要旨なり。要するに支那天台敎旨の敎論は一念三千の法門卽ち佛陀の覺の境に、三諦雙遮雙照の觀法に達し得べしとなすにあり。さて此空假中三諦圓融なる

圓教の旨に依りて見れば、金智不空、眞言實事相の六大、四曼三密(即ち密宗)は圓教の有門にして即ち假諦なり。達磨傳來の不文字宗即ち(禪宗)は圓教の空門にして即ち空諦なり。然るに有空の二門を兼ね、空假の二諦を雙遮雙照するものは圓教中の中諦にして即ち天台宗なり。故に台密禪の三家は其教旨を尋ぬれば圓教の三諦に外ならずとして、天台圓教の旨より禪密二教をも合せ、且つ圓戒をも加へ一大圓教となしたるものこれ最澄の天台宗なり。之に依りて叡山佛法の基礎は措かれぬ。去れど祖師未だ台密異同の教判をなさゞりき。慈覺に及び初めて隨他意、隨自意を以て「法華」「大日」兩經の異同を辨じ、智證に至りて密に意を傾くると深く、五時五教の教判をなし遂に顯劣密勝、理同事勝と判釋し、安然は慈覺、智證の意を取りて四一十門を立て、大に五時五教の教を張り茲に日本天台の教判大成せらる。

神佛の習合的思想の先蹤は奈良朝の前後に現はれ、又通常本地垂迹說、弘法傳教兩大師の時代に始まると言はるゝも、本地垂跡即ち神は佛の垂迹にして佛は神の本地なりとまで發達したる考が、何れの時代に確立するに至れるかは大に研

究を要す。而して先づ弘法傳教の習合思想の眞義如何を兩師の佛教の信仰より根本的に觀察せざるべからず。

傳教は俗諦常住を以て自家の相承となし、山王、王法は一轍なりとし、治世の語言實相と背違せず、治世の語言は王法、實相は山王にて俗諦王法實相は常住なり。國亦これに洩れず若し分眞に至らば一切衆生の應をなし、一切國土の應をなす。今名字位中然る能はざるも其理を悟り深く信じ、偏計の執を去りて一實の理に趨り勇進練修せば意誠に心正しく修身齊家治國を得るに至るべし。加ふるに一實の理流溢し、諸天善神の祐護を得て立身興家し、災を禳ひ天下國家を福すべしと說き、傳へて曰く、明神にあひてその名を問ひしに、竪に三點を下し横に一點を加へ、横に三點を引いて竪に一點を加ふと言へりとて字形に三諦即一の意を寓し、從來叡山に鎭座せし大山咋神は即ち山王神にして、釋迦、藥師、彌陀三尊の垂跡なりと說き、法華の諸佛出世唯此一事實の法語を取りて山王一實神道の名を冠す。而して山王權現の神道は王法と相承一轍而も佛法の異名なりとし、敬神尊王の國情を發揮せり。三諦圓融の信仰に立ち、俗諦王法と實相との眞如一實が發して

宗教的根底より尊王の國家を莊嚴し、帝室の崇拜を受け社會の人心に徹せり。要するに山王一實神道の眞意は、天台の一心三觀、一念三千、三諦圓融の教旨にあり。然るにこの佛教よりの攝合說が後の所謂神道思想組織の濫觴となれり。

眞言宗と兩部神道の教旨――密教は既に奈良朝より傳來せるも、弘法獨り專ら其正流の秘決を得來れり。大師の眞言宗は印度支那の秘密教と相異る。大師は顯然たる地、水、火、風、空、識の六大を以て萬法の體とし、之を六大體大と名づく。法界無限なるも、佛菩薩神鬼吾人に至るまで皆六大ならざる者なく、六大は無碍にして擧一全收なり。又六大を分つに地、水、火、風、空の五は胎藏界にして識大は金剛界なり。故に又胎金二不二なりとて六大無碍、胎金二不二の諸法觀を立つ。金胎兩部の六大の有する相貌無數なれど、概括すれば四類の義相を出てず。第一大(諸)の佛菩薩神鬼及び人間の身體萬物の形象の如き類、第二三昧耶(佛菩薩神鬼の印契等又人間の服裝の如き類)第三法(佛菩薩神鬼等の名號)第四羯磨(佛菩薩神鬼等の威儀事業の類)なり。然るに六大は無碍交涉するが故に四大義相も諸佛菩薩及び吾人等に於て互具せざるべからず。然るに輪圓具足の義を曼荼羅と名づくるが故に、

大三法鞞の四の義相の相互交涉する旨を表して各曼荼羅と名づけ之を四曼相大と云ふ。次に四曼相大の身口意の三業に於ける發表、即ち身に發表して手に印契を結び、口に各種の眞言陀羅尼を誦し、心に心佛衆生の三平等を觀念する之を三密用大と名づく。斯くて弘法大師は六大無碍、胎金二不二なる諸法觀に依り四曼相大及び三密法門に基づき更に機教相應と教益甚深の二門とに依りて遂に成佛するの理を明かにせり。即ち三密を修して成就すれば此身を直ちに佛陀と成らしむと說き、加持師經の功力を主とす。斯くて躰相用の三大は眞言宗の要領なり。さて萬德具足の眞理たる秘密莊嚴心に達する修行に教相と事相との二途あり。教相とは覺の所在を知るとにて、事相とは之を修すべき道を示すものなり。斯く事教二相を修する事に依り即身成佛を宗致とするも、直ちに即身成佛の說を談ずる文と又即身に佛果に入る資格を備ふる益ありと說けるとあり。且つ獨り大師は密教の爲めに教判をなし、佛教全躰の究竟する處密教にありと說けり。教判は佛身論を根本とし、法報應三身中の何れなるかに依りて其說顯密の二教に分るとなす。以上は眞言宗教相の要旨のみ。事相の儀軌極めて繁雜なれど、そは

筆錄すべきものにあらずとせらる。

東大兩密の關係と異同――東大兩密、既に支那に於ける相承より相交渉し、更に本邦に來りても授受の關係深けれど、そは主として事相の點にあり。教相上には二者劃然たる區別あり。兩密教相異の根本は、東密は三密のみを以て理想的宗教作用とし、「大日經」を正所依とし之に依りて一代教を見る故に「大日經」のみを密教とし、更に眞言宗を各宗の外に立せんとす。然るに台密は「法華經」を以て根本とし天台圓教中に眞言教を立せんとし「法華」に依りて一代教を見「大日」の秘密說をも判ずるが故に「法華」「大日」「金剛頂經」等は一致の秘教にして、唯「法華」は理密に限り「大日」等は事密をも兼ぬるの別あるのみとなすこととなり。但し台密家の中にありても其理想的宗教作用の見解、やがて圓教と密教との關係に變遷あり。終には理同事勝と說きて殆ど東密に近からんとするに至る。

空海は古傳の思想を眞言宗の信仰と教義とに取り入れて判然たる說明的思想を形れり。即ち大日如來は金胎兩部を具し萬象を蓋ふが故に、一切諸法はみな兩部より成り、又大日如來ならざるはなし、一切神祇亦然りと說き、これを兩部神道と名づく。說きて曰く、天地開闢の始、含む處の芽これ國常立尊にして、一念起らざる處萬象能生の地、本覺の無色無名と一致し實相無相なりと說き、伊弉諾尊を金剛界に、伊弉冊尊を胎藏界に配し、一は智慧を以て一切の障を破するの父、他は慈悲を以て一切を攝する母なり等と說き、即身成佛義に依りて此身直ちに高天原に在るの理を說く。後世に及ぶに從ひ伊勢兩宮の神を初め、神道の諸神を各佛に配するに至りたるも、空海が兩部神道の眞意は眞言の宗教的信仰と教理とに依りて古傳の思想を說けるまでにて、兩部神道と古傳の思想とは全く其起原を異にす。

平安朝の漢學と祭神等――思想界の中心となれる佛教は更に其力を學問文藝に伸ばし、神儒をも壓せり。宇多の世、從來の遣唐使、留學生廢せらる。平安奠都期は亦文藝美術上にも注意せられ、美術は此期にも佛教と關係あり。平安朝時代は制度よりも文藝に力を用ひたり。初期に於て唐の感化を受け漢文學最も流行せり。又國學は益〻衰へたれど大學は愈〻盛に私學も增加せり。宇多、醍醐の御代儒學者の嚆矢として菅原道眞あり。道眞に依りて忠孝一本の說初めて我國に明言さる。道

眞と同時に三善清行、清原頼業、後に至りては三善康信、大江廣元等ありたるも、獨頼業が「禮記」の中より大學、中庸の二書を抽き本經に據りて解說せることの外、儒學上には何等の見るべきなく、學勢再び次第に衰ふるのみ。平安朝初期に修史事業一段進歩し、漢文並に國文の歷史續出す。又當代の宗教、日本文學思想を深からしめたり。されど平安朝の文化は遂に文弱の弊甚だし。

大神宮を始め重なる神宮儀式帖は奈良朝末より平安朝の始に記されたるもの勘からざりしが、此時代神官は唯神事、祭祀をなすのみにて神祇の道を說くもの無し。唯平城帝大同三年に忌部廣成「古語拾遺」を獻ず。神祇道の衰頽を慨して作れるもの記紀と並べて上古の史たり。神宮寺出でゝ以來、更に傳教、弘法の攝合說等に依り祭神の事僧侶の手中に歸す。神社次第に增營せられ、祭祀の儀式も漸く定められ、大寶令以後醍醐天皇の朝「延喜式」「神名帳」編成せらる。延喜式に依りて朝廷の祭奠祈禱に預る神社三千壹百三十貳坐を定めらる。諸社の祭祀の來歷等祭神思想の變遷を見るに參考すべきなれど、こゝに述ぶる遑なし。德川時代平田篤胤が「延喜神名式」に依り諸國の社格祭神等を記せるものあり。

僧官僧位等の流弊、思想上の發達等――天台眞言の最盛期に當りて僧侶の官階等、複雜となり形式に流れつゝありしが、他方には此間に思想上の發達見るべきあり。東寺には宗叡の後に益信、聖寶、寬朝、仁海等出でゝ密教の蘊奧を窮め、叡山には慈覺智證出でゝ天台の妙義を興し、慈惠、安然、源信、覺運、尋禪、性空等の學匠は孜々として教義を研鑽せり。

僧徒の軋轢儀式及び僧官等に伴ふ弊より諸寺の爭鬪起りぬ

平安朝佛教の特色――奈良朝の佛教は宮廷的又は國家的の性質を有し都市佛教なりしが、平安朝に入りて天台宗の叡山、眞言の高野開かるゝに及んで大寺の山上に建てらるゝもの多く、平安朝、佛教は山嶽佛教となりぬ。其結果一方には地方の開導となり、他方には隱然たる勢力を集中することゝなれり。平安朝台密の二大宗は、佛教の聖道門として實驗的に起り日本化せるも、其大勢は此時代の文化と同じくなほ貴族的なり。而して此時代に佛教、日本思想界の中心となれり。之が平民的となるには後の鎌倉時代を待たざるべからず。而して鎌倉時代の佛教は當時の時勢に依りて一方に亦武士的となりぬ。

大化の前後以來續いて平安朝一代の氣運は佛教の觀念法門が主に國家の上流に發達するに止まらしめたるなり。平安朝は天台眞言二宗の盛時にして、加持祈禱流行せるも、これ此時代に至りて我宗教思想は種々の修行に於て佛の威力を感じ得るに至れる者なるに依る。斯かる時代の佛教が儀式的の形を取れると、國民の宗教的自覺の發達として斯かる信仰もあるべく、後世の見解より一概に現世祚禱の迷信佛教となすは其眞相を觀ざる者なり。佛教の救濟的眞髓に到るまでの聖道的宗教の意義と時代の莊嚴と文化に於ける貢献とを見ざるべからず。平安朝佛教に至りては更にその中心に佛教の信仰確然たるものあり。此時代は日本佛教が知力的意志的に發達したるにて蘊貯の時代なり。次代佛教の實驗的信仰の甚深なる思想は、この時代に於て究められたる佛教の教理に依りていよ〳〵明かにされたるなり。絶對なる宗教的信仰の現はるゝや必ず思想上に順序あり。即ち人生上の自覺を經ざるべからず。一代の宗教はその時代の宗教問題の氣運の如何なるものかに依るなり。

形式的宗教の弊害と宗教思想の過渡期淨土門の漸興——白河天皇の御代に至り天皇佛法を信じ、讓位の後出家し法皇と稱し、三朝の間院政を行はる。鳥羽上皇も先法皇に倣ひ三朝に亙りて院政を聽き、教權を以て政治に臨み大權所を得ず。斯くて形式的宗教の弊根源をなして禍を招くの端を生じぬ。寺門に於ける亦同一傾向にして村上、冷泉兩帝の頃より起れる神官及び國司郡司と南都北嶺の僧徒との紛擾爭鬪は、白河天皇以來僧徒の横暴殆ど停止する處を知らず。此處に僧兵なるもの現はれたり。これ寺院の領地益〻多きにつれ、地方政治の紊亂と兵制の破壞とは、寺領の守備として武士を養ふ要を生ぜしめ、又武人の出家するもの多く、且つ浮浪の徒の僧を裝ふもの少なからざるより、所謂僧兵を生ぜるなり。斯くて平安朝半頃より形式的宗教の弊害は院政時代政教混合の弊と僧兵の横暴となり、遂に武家の强勢と共に天下を惑亂する禍根をなしぬ。而して自覺的新宗教興起の氣運を促すに至り、此間に念佛門漸興せり。即ち院政時代中、其始より、鳥羽帝永文五年融通念佛開立の頃まで凡そ一八〇年間念佛門の漸興を見、斯くて自覺的新信仰の端を開き宗教思想の過渡期をなし次の宗教的苦悶の時代續き來る。阿彌陀如來の名號を唱念して安樂國に生ぜんと希ふとは本邦に極めて古く、

聖德太子既に西方を願ひ、皇極孝德の朝慧隱「無量壽經」を宮中に講ず。後行基菩薩また佛號を高唱して衆生を勸め、三論の智光は淨土曼荼羅を畫き、又「淨土論註」の作あり。奈良朝の末に及びては光明皇后最も無量壽如來の誓願に歸命し、崩後勅に依り諸國國分寺に淨土の畫像を作らしめ、「和讃淨土敎」を寫さしめ、或は彌陀丈六の像を作らしめし等のことあり。後に至りても法相、三論、天台、眞言の各宗も西方に歸するとは相通じたる如し。何れの宗旨にても觀法には禪を以てし、修行の間には唱念する事多少行はれたり。去れど後世念佛門、興隆の敎義上の起源を求むれば、叡山の念佛門即ち天台の常行三昧にあり。而してこれは傳敎の四種三昧の一たる常行佛立三昧に濫觴し、慈覺大師以後完備したるもの、佛立三昧は「般舟三昧經」に依りて立せらる。天台初修の學生は十二年間結界の外に出でずして四種三昧を修するを法とす。慈覺大師、想應和尙より慈惠僧正に至り、叡山の佛敎大に隆盛を極め、顯密、圓戒時に起れるも、淨土の敎又此頃より新氣運に向へる如し。朱雀帝の頃より圓融帝の初めに空也上人專ら佛名を唱へて巡化し異彩をはなてり。空也上人は慈覺大師の後系に屬し、心を西方に傾けたる延昌の徒なり。村上天皇の頃に至り空也念佛とて佛前に於ける一種の儀式流行す。源信、覺運、尊禪、增賀、寛印等皆等しく願力に歸し、就中源信僧都は淨土敎の至極に至りぬ。僧都の述作多きが中に寛和二年正月の作「往生要集」は、佛敎の本旨たる往生極樂の業は念佛を以て本となすことを說き、後代他力信仰勃興の源となる。後都率の覺超これを繼ぎて、亦彌陀佛力の不思議を讃す。院政時代鳥羽帝永久五年、良忍上人常行堂の堂衆より出でゝ融通念佛宗の起原を得、崇德帝天治元年勅を奉じて開宗す。斯くて念佛門特に平安朝末より興隆の氣運を示し來たる。

融通念佛宗――良忍上人叡山に登り天台、密敎を修したるも、日夜學解に忙しくして出離の要道を忽にするを嘆じ、後大原に退隱し來迎院を建て、一日六萬遍を專唱し「阿彌陀經」を誦す。傳に言ふ、永久五年五月十五日三昧中親しく阿彌陀佛に面し融通念佛の示誨を受く偈に曰く、

一人一切人、一切人一人、一行一切行、一切行一行、是名他力往生、

これ融通念佛宗の起原たり。

融通念佛宗の宗義は彌陀直授の法門なりと稱し、其直授と稱する偈文「十界一念

融通念佛、億百萬遍功德遍滿」とある如く、念佛一行の互融通徹に依りて往生の妙果を證し得るなりとす。正依本經は「華嚴經」「法華經」なり。又淨土三部經を傍依經となし是等諸經の義意を解釋するに華嚴の「五敎章」天台の三大部等及び淨土の「往生淨土論」を以て指南す。上人は又我邦聲明業の中興と稱せらる。融通念佛宗は自力宗ならざるも唯他力宗の興れる過渡期の所產なり。

四　宗敎的苦悶と佛敎開發の時代

宗敎的苦悶と佛敎の新勃興――院政時代の末、保元、平治の亂を經て源平內亂時代には全く日本上下の人心空前の苦しみを受けたり。平安朝の太平の世下りて修羅の巷と化し、妻子離散し、父子相戰ふの樣となる。甚だしき悲慘を重ね、世の無常を感じて初めて國民一般に人生が問題となり來れり。斯く世を擧げて苦しめる時に、法然上人は盛に念佛往生の法門を說きて世人を救へるなり。

平家は保元平治の亂に大功を立て、遂にその擅權期を見るに至れるが、元曆二年に至り、檀浦に滅亡して鎌倉武家時代に入り、更に承久の役後政治の實權全く武門に歸す。斯くて我國は武家制度時代に入り、政治上の動亂より國民が人生問題を自覺し來りて一般に佛敎の眞信仰興る。一方には大化以來わが國の文明を裝ひ來りし律令制度改變さるゝと共に、種々の方面に國民性を發揮し來るあり。斯くて源平內亂時代の頃より鎌倉武家時代の初に至る間は、宗敎的苦悶の時代なり。この頃山門佛敎は名利の巷と化し、一世渾沌として眞に道を求むるものには如何なる學問も時代を救ふ能はず。日本佛敎史は茲に眞に人生問題を自覺し來れるなり。而して此一代の思想は先づ法然上人に於て代表せられ苦しみ極まりて他力信仰の光現はる。これ法然上人の他力念佛の敎なり。即ち上人從來の聖道門の律法主義を破りて他力信仰主義に到達せり。換言すれば日本佛敎の思想上の經過が今や眞に實驗として現はれ來りて、茲に樣々なる自覺、安心の實驗現はれたり。即ち法然上人の他方には日蓮上人あり。又法然上人の淨土他力敎は親鸞聖人に至りて其極に發展し、且つ榮西道元等の傳來せる禪宗あり。是等の高僧

皆天台若くは眞言宗より出で、一世の宗教的苦悶を經來りて、鎌倉武家時代殆ど一百五十年間、實に佛教の敬虔眞摯なる新宗旨勃興の時代を現じ、日本佛教其頂點に達す。鎌倉時代より室町時代の間、日本の宗教思想最高潮を現じ、佛教は實驗的民間的となれり。宗教上の問題は人生問題より發する求道、解脫の問題のみ。此問題に於てのみ宗教の意義と光とは生じ來たる。此時代の宗教は凡て理屈を離れ內心の實驗より光を認め來れるにて、他力教に於て特に然り。即ち學問上の理屈なく唯自覺に依りて自己の上に佛の惠を感じ來りて打ち立てられたる宗旨なり。而して一代の宗教的氣運が認め出てたる佛陀の光明に對する信樂の極まれるが他力宗なり。

鎌倉時代に勃興せる佛教の新宗派は、そが平民的實驗的信仰、鎌倉時代南北朝及び室町時代にかけて傳播せり。南北朝の初に當り、北畠親房は國民的信仰の復興を計りたり。去れど後の神道家は外形に流れぬ。又戰國時代の末葉天文十年(西暦一五四一)基督舊教ジェスイット派渡來す。

先づ淨土他力門の興隆より觀ん。前章末宗教思想の過渡期の條に於て一言言ひ

及べる源信僧都「往生要集」の序に「夫往生極樂之教者濁世末代之目足也。道俗貴賤誰不歸者。但顯密教法其文非一。事理業因其行惟多。利智精進之人未爲難。如予頑魯之者豈敢矣。是故依念佛一門聊集經論要文。披之修之易覺易行」とあり。法然上人幼時此文を見て大に感ず。出家以來、只管求道の苦心を嘗め、最後に黑谷の報恩藏に入り心血を濺ぎて一切經を讀む。善導大師「觀經疏」の「一心專念彌陀名號、行住座臥不問時節久近、念々不捨者是名正定業、順復佛願故」の文に至るや、苦しみ極まれる人生に佛陀救濟の願力を認め、絕對の慈光を仰げり。法然上人以前の佛教は佛陀を信ずれども、自力修行にて光を求め行く態度なりき。然るに茲に「順彼佛願故」即ち既に阿彌陀佛の願力ある事に於てのみ信樂を獲たり。而して絕對に信順する此「願」これ法然上人の信受せる他力佛教の根底なり。即ち上人の教法唯本願に依り、南無阿彌陀佛の一行にて助けらるゝを說かる。日本佛教史上茲に根本の宗教的眞髓開闡せられたり。上人高倉天皇安元元年一向專修の宗を開き、自行化他、唯念佛のみを專らとせられ、聖光、證空、聖覺、隆寛以下の高足集り、一世の法匠彌陀本願の義を上人より傳ふ。

親鸞上人幼年にして深き無常感に堪へず。切實なる求道心に驅られて出家す。爾來漸く深く眞摯なる人生の經驗を積み來り、十九才の時、河内磯長の聖德太子の廟に參籠し、「汝命根應十余歳」の靈告を蒙る。茲に於ていよ〳〵生死罪濁の世に堪へず、身を捨てゝ道を求む。二十九才の時聖覺法師に導かれて法然上人の教化に遇ひ、唯佛願に依り念佛して救はるゝを聽き、初めて信心發得す。「親鸞上人御傳鈔」

第二段に、

建仁第一の暦春のころ、隱遁のこゝろざしにひかれて、源空上人の吉水の禪坊に尋まいり給き。是則、世くだり人つたなくして、難行の小路まよひやすきによりて、易行の大道におもむかんとなり。眞宗紹隆の大祖聖人、ことに宗の淵源をつくし、教の理致をきはめて、これをのべ給に、たちどころに、他力攝生の旨趣を受得し、飽まで、凡夫直入の眞心を、決定しまし〳〵けり。

「歎異鈔」は聖人の信仰の極致を表はされたるもの、其第二節は晩年に於ける聖人自身の信仰の告白の如し。

各〻十余箇國のさかひをこえて、身命をかへりみずして、たづねきたらしめたまふ御こゝろざし、ひとへに往生極樂のみちをとひきかんがためなり。しかるに、念佛よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、こゝろにくゝおぼしめしておはしましてはんべるらんは、おほきなるあやまりなり。もししからば、南都北嶺にも、ゆゝしき學生たち、おほく座せられてさふらふなれば、かのひとゞにもあひたてまつりて、往生の要、よく〳〵きかるべきなり。親鸞におきては、ただ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおほせをかうむりて、信ずるほかに別の子細なきなり。

後堀川天皇元仁元年、常陸國稻田の坊に於て「教行信證文類」六卷を撰し、常野の間に遊化し、只管本願廻向の信を喜びて他力信仰の極致を開闡す。

一代の宗教的氣運の赴く處、法然上人の教化を蒙むるもの、親鸞聖人を始め法然上人門下の僧徒の外、坂東一の武者熊谷直實も念佛に依りて大安心を得、奈良大佛を燒けりと言ふ平重衡も念佛の信心に依りて救はれ、關白兼實公亦上人の「往生要集」の講說に感泣せり。斯く上下貴賤悉く念佛に歸し、源平時代より鎌倉武家時代の初めに至る暗黑苦悶の一世、他力救濟を蒙れり。而して此これに次て自覺

せる鎌倉時代現はるゝなり。

法然上人の開立に後るゝと十六年、天台慈覺門下に出でし榮西禪師、後鳥羽帝建久二年宋より歸り、わが邦に始めて臨濟禪を唱へ、南北諸宗の間に立ち圓密禪の並立を說き、興禪護國論を著はす。京都鎌倉の間に往來して直指人心見性成佛の法門を說けり。榮西禪師滅後十余年、後堀川天皇安貞二年同じく天台より出でたる道元禪師曹洞宗を傳ふ。其頃亦律宗の再興あり。其外鎌倉初期には南都佛教一時多少の回復を致せり。北條時賴は禪宗を興隆し、建長寺を建て宋の禪僧蘭隆を延いて第一祖とす。此頃漸く禪宗獨立を得て勃興するに至れり。政治の中心鎌倉に轉じたると共に佛教各宗亦東漸し、新興の佛教益隆盛に赴きたり。後深草帝建長五年、頃眞言宗より出でて後更に天台に轉じたる日蓮、唱題成佛の法華宗を唱へ、念佛、禪等他宗を誹謗せり。後一遍上人、後宇多天皇治元年時宗を開立す。淨土宗は法然上人の徒漸く東西に傳布す。又日蓮宗は日蓮上人滅後主として甲武總房の地に傳はり、日像上人に至りて華絡に入る。此間禪僧の支那に往來するもの極めて多く、臨濟禪隆盛を極めたり。斯くて鎌倉武家時代に於ては淨土門並に法華

及び禪の新宗教勃興し、平安奠都期以來朝野の尊信を得たる天台眞言等の古宗、其餘威を示すのみなる時代、旺に傳布し來りて偉觀を呈したり。弘安元年建長寺第二祖として、時宗に依り支那より祖元即ち佛光禪師聘せられ、道隆に續き時宗の師として信仰を受く。文永、弘安に於ける元寇に際し、修禪の執權北條時宗、確然たる決心を以て未曾有の國難に當り、上下の人心に國家的觀念確立し、忠君愛國相合して國民的自覺を鞏固ならしめ、又武士道の發達を來す。これ一代の宗教氣運が其根底をなせるものなり。鎌倉幕府創始以後の時勢に依り、國民一般は直ちに人間の運命と云ふ根本問題に想到せしめられ、深く生死罪濁の人生問題の解決を得て佛教勃興せると、一は此時代の歷史的特質に基づく處あるべきも、人生の根本問題の宗教的解決と、これに伴へる文化の根本的性質とは永遠に生命あるなり。斯くて亦、鎌倉武家時代はわが日本的文明を出現せり。

鎌倉時代は政治の主權、京都と鎌倉とに分れたるより、文明も平安朝の文化を承けたる京都中心の文明と、宋元の文化を熔鑄せる鎌倉中心の文明と二樣あり。鎌倉時代は佛教勃隆等の爲め漢學廢頹せり。道眞賴業以後、唯四條天皇の頃菅原爲

長あり。禪僧弁圓と儒教の優劣を論ぜんとせり。學問は終に僧侶の手に歸し、僧侶は亦其手を文學上にも伸して、一大勢力となれり。此時代進歩の頂に達せる歌界にも西行、長明、寂蓮等の僧あり。和歌の外方丈紀を初め諸種の文學的史傳等も大抵僧侶の手に成れり。斯くこの時代の文明は僧侶の力に依るもの多し。

新興佛教の各宗

淨土宗　他力念佛の教旨は古より始終大乘佛教と相離れず。印度にありては馬鳴、堅慧其端を發きて龍樹、天親等これを祖述し、支那にありては三國の世、既に「無量壽經」の譯成り、晋以後には淨土教絶ゆることなし。支那の淨土教には慧遠流善導流、慈愍流の三流あり。本邦淨土教は法然上人以前、平安朝に空也、源信、良忍の三大德あり。法然上人の淨土宗は支那の善導流を繼承せるものにして、自ら「我善導一師に因りて淨土宗を開く」と云ひ、彌陀本願念佛によりて宗立つ。淨土宗の要旨は彌陀本願念佛が往生の業因たるを信じたる專誦念佛にあり。而して難易二道を立てて一代教を判釋す。善導流の淨土宗は其師資相承は龍樹、天親、菩提流支(以上印度)曇鸞、導綽、善導、懷感、少康(以上支那)等なり。また所依の經論は「大無量壽經」「觀無量經」「阿彌陀經」及び天親の「往生淨土論」を淨土の三經一論と定む。教相判釋は、

- 龍樹
  - 難行道 ═ 聖道門 ═ 漸教……此土入聖得果法……三經一論說これなり。
  - 易行道 ═ 淨土門 ═ 頓教……此土入聖得果法……一代諸教說これなり。
  - 道綽
  - 善導

而して漸なる難行の聖道門を捨てゝ頓なる易行淨土門に入るべしと勸む。淨土教の教義は總て「大經」に說ける彌陀の本願が根底なり。法然上人は彌陀本願を念佛往生願と名づけ、萬善諸行を捨てゝ念佛一行を撰び凡夫往生の正業正因とす。又「觀經」の如きは一面萬善諸行を列ぬるより、上人更に廢立、助正及び傍正の三義を以て其意を釋せり。三義は淨土教教義の三綱領なり。

法然上人の門下、種々異流を生ずるに至りしは畢竟本願の見解異なり、從ひて三義の解釋を異にするに依るなり。聖光上人化を鎭西に布きてより、法然上人の下自ら東西に分れ、東京都にあるもの亦數流の義を分ち、上人滅後次第に夥しき異流を生じたり。去れど其主なる者は西山、長樂、九品、一念義の四なり。之に鎭西の一派を加へ淨土宗の五流となす。勢觀、源智は別に開祖の正派を傳へしも一傳して

鎮西と合し、鎮西、西山各、分派せり。西鎮の二流は傳へて今日に至る。而して鎮西實に十の九を占む。

浄土眞宗　親鸞上人「教行信證文類」六卷を撰せる時を以て浄土眞宗の開立となさる。親鸞上人一代の教化は眞宗の「教行信證」の外なく、「教行信證」は眞宗の根本聖經なり。法然上人一代の教化は眞宗の教證を興し、彌陀擇撰の本願を濁世に弘めたる外なしと、親鸞上人は喜びたり。實に教行信證は眞宗の骨目なり。一代佛教は難行道と易行道とに分れ、易行道は佛教全體の味をたゞ念佛の一法南無阿彌陀佛の一つにて信受する念佛一行三昧の教なり。一代佛教を出達點として考ふれば、彌陀の本願念佛一行を一代佛教より味ふことも出來得れど、釋尊は或は修業或は戒行等の教法を說きたるもこれ等は釋尊自身の教法なり。釋尊が此世に出興せる謂は唯本願南無阿彌陀佛の一法を衆生に知らしめん爲めの導きに外ならず。即ち他力念佛は阿彌陀佛が念佛の一法を以て一切の衆生を救はんとの深重の本願がありて、この本願より顯はれ來れる念佛なり。南無阿彌陀佛の一行こそ實に彌陀大悲の根本なり。即ち南無阿彌陀佛の悲を衆生の心に屆けて、一切衆

生を救はんとの大悲の親心の根本が撰擇本願にて、此本願こそ實に我等衆生が救はるゝ根源なり。故に阿彌陀佛の第十八願は十方の衆生に我名を稱へしめて、悉く救はんとの根本の本願なり。南無阿彌陀佛の一佛名號を撰びて我等衆生を救ひたまはることが、これ佛教の眞髓、他力信仰の根源なり。釋尊一代八十年の間或は華嚴經に於て廣大なる佛陀の境界を說き、又涅槃經を說きては如來常住無有變易の妙諦を敎へたれど、要するに親鸞聖人の信仰より云ふ時は一代藏經皆此阿彌陀如來の廣大の惠を說きたるものに外ならず。殊に「大無量壽經」は佛教の根本たる彌陀の本願を正面より說かれたる經にて親鸞聖人教行信證の敎は實に此大經より來る。釋尊一代の敎法中より眞實の敎を撰ぶ時は實に此「大無量壽經」一部なり。佛陀さとりの境界より罪深き人間世界を覗そなはし、罪惡生死の我を救ひ眺めて罪ある者を救ひ上げたまふところが、實に佛教の根本否凡ての宗教の宗教たる點なり。而して其根本の顯はれたるが彌陀大悲の本願力、撰擇施與の眞實の敎なり。更に敎行信證の四つ皆彌陀佛本願の外なし。さて眞實の敎即ち本願より眞實の行が來るなり。行と云ふは大悲の根本の南無阿彌陀佛の一行な

り。即ち念佛名號一つの上に全佛教皆籠るなり。南無阿彌陀佛が即ち撰擇本願にして、大行の念佛とは南無阿彌陀佛と稱へつゝ廣大の惠を喜ぶことなり。念佛は佛の大慈悲なり。呼聲なり。又善導大師は南無阿彌陀佛の一名號の中に願行とも具足せりと云へり。然るに阿彌陀佛の本願の親心を頂くとが實に他力信仰の眼目なり。即ち光明名號の催に依り、最後に惠の頂かれたるが信樂開發の一念なり。法然上人の念佛の行と親鸞聖人の信とは、別のものならず。即ち信とは此念佛の行を心に信受されたる樣なり。衆生の心に南無阿彌陀佛の廣大なる願より信が來るなり。偖て一度他力の信を獲れば即得往生なり。即ち煩惱具足の凡夫、南無阿彌陀佛と喜ぶ一念、淨土へ生るゝものと定められ、極樂の正定聚の一人とせらるゝなり。而も死後涅槃の悟が眞實の證なり。斯く教より行が出て、その行と信ずる一念に證が現はれ來るなり。而して涅槃の境界は如來常住無有變易の眞如の妙境界なり。

禪宗　禪宗はそが一宗として獨立せるは達磨西來以後のことなるも其淵源は既に釋迦佛の時にあり。大梵天問佛決疑經」の中に、佛一日靈山會山にありし時、大

梵天王、金色の蓮華を捧げて說法を求む。佛唯、金波羅華を拈し、睟目揚眉するのみ。衆皆會せず。唯迦葉一人微笑す。佛告げて曰く「吾に正法眼藏、涅槃妙心實相無相微妙の法門あり、今摩訶迦葉に附屬す。汝應に善くこれを護持すべし」と。これ禪宗の濫觴なり。爾來此佛心切を心を以て心に傳へ菩提達磨に至る。所謂六度萬行を一禪に攝し、不立文字教外別傳、直指人心、見性成佛の佛心宗を開立せるは達磨以後の事なり。五祖支那の大滿の下に六祖大鑑慧能と、大通神秀の二大師あり。頓漸の二流、南北の二宗初めて起る。後南宗一傳して七宗と分る。

禪宗は又佛心宗とも名づく。禪とは梵語なり。禪那にして靜慮或は定或は正思惟と譯す。修禪して心性を悟得するを教旨とす。禪定に無相の觀に漸入する空如來禪と、達磨大師直指の學問知解を用ひず直下に本心を了悟する祖師禪の二あり。又臨濟の楷級禪を主とし、曹洞の默照禪を貴ぶが如く、家々多少の相異あるも、第一義諦に於ては毫も異同あるなく、自己の心地に佛の心切を傳附し、修證不二染淨一如に踐み、四六時中三昧王三昧に住して見性成佛するを宗旨とす。即ち禪宗は唯佛與佛、以心傳心の法門にして、不立文字教外別傳、直指人心見性成佛」は禪家

の教判なりと言ひ得。要するに唯一の佛心を所依とするなり。而も禪宗自家の本義より云へば、教禪二相に墮せず、戒定慧の三學に局らず、佛陀の三身四智にあらず、心にあらず物にあらず、善にあらず、惡にあらず。一切の名相文句總てこれ用不着なり。一切の相對に墮せざる消息を假に名づけて禪と云ふ。斯く見性成佛、不立文字、佛心草傳を宗とすれど、其頓悟の消息即ち實相觀を禪家の實相觀に依りて窺はんとすると、以て未だ禪家の境に達し得ざるも、門外の徒に取りてはまた止むを得ざるなり。禪宗の實相觀と見得る臨濟の四料簡と洞山の五位とあり。臨濟錄の四料簡の文に、

師晚參示衆云、有時奪人不奪境、有時奪境不奪人、有時人境俱奪、有時人境俱不奪、時有僧問、如何是奪人不奪境、師云照日發生鋪地錦、瓔珞垂髮白如絲、僧云如何是奪境不奪人、師云王命已行天下偏、將軍塞外絕烟塵、僧云如何是人境兩俱奪、師云、拜汾絕信獨處一方、僧云如何是人境俱不奪、師云王登寶殿野老謳歌、

この文に依りて禪の實相觀として四つを認め得、

一 奪人不奪境　二 奪境不奪人、三 人境兩俱奪、四 人境俱不奪

人と言ふは心と見るを得、又境とは法即ち事物と見得。兩者は何れも相對的關係なり。又これに執着し或は名相に拘泥すれば障碍となる。而して各〻の實相觀は心と事物とか實相に對する關係なり。即ち如何にせば座禪の工夫によりて實相、妙用、妙心が現はるゝかと言ふことなり。この四つを自由自在に應用し行くが臨濟の四料簡なり。次に洞山の五位とは其本文は、

正中偏　三更初夜月明前、莫怪相逢不相識　隱々猶懷舊日妍
偏中正　失曉老婆逢古鏡、分明覩面別無眞　休更迷頭還認影
正中來　無中有路隔塵埃、但能不觸當今諱　也勝前朝斷舌才
偏中至　兩刃交鋒不用避、好手猶如火裏蓮　宛然自有沖天氣
兼中到　不墮有無唯敢和、人々盡欲出常流　折合還歸炭裏坐

正中偏、偏中正、正中來、偏中至、兼中到の五つを五位と云ふ。正とは實相、偏とは差別の象相なり。而して初三位は各諸法と實相との關係、換言すれば一つが他に於ける關係を表はせるもの、即ち實相觀にして詩句は之を詩的に表はせるなり。二位

は妙用の極致たる第五位乖中到に達する道行きなり。乖とは正偏共に一味となる境なり。茲に注意すべきは坐禪即ち觀法と云ふ佛教の一門もこれ亦決して單なる理觀にあららず、何處までも信仰的、宗教的なるものなることを觀べきなり。

面山和尚の曰く「石祖曰く吾此法門は先佛の傳授なり。禪定精進を論せず、唯佛知見に達すと。佛の知見とは即ちこれ涅槃妙心自己の光明にして六祖(惠能)の無上大涅槃圓明常寂心と云ふ所以なり。」

日蓮宗　日蓮上人「法華經」の功德を唱へ日蓮宗を開立す。「法華經」を所依とし、大乘教の甚深なる教理と實行し易き法門とを以て開きたる宗旨なり。即ち法華經に依りて立ち、之を釋尊出世の本懷として唱題成佛を要旨とす。これ末法の世に法華の妙理を修證すること難きも妙法蓮華經の題目の中には法華の妙理を含み「妙法の義理を知らざる人も唯南無妙法蓮華經と唱ふるに解義の功德を具て：：任運に其意に契ひ」衆生の佛性を喚び起すが故なり。即ち「妙法蓮華經」の題目を能詮とし、心念口唱の所顯は即身成佛せざるはなく、娑婆即寂光土なり。而して本宗は自力にも亦他力にもあらざる妙力なりと言ひ、其教義として、五綱、三秘、本迹、

攝折、三執、五種、三益の七科を說く。

日蓮宗は「法華經」八卷「無量義經」一卷「觀普賢經」の三部に依ると雖「無量義經」は「法華」の開經「觀普賢經」は「法華」の結經なり。註疏は「註法華經」十卷「御義口傳錄」二卷「遺文錄」三十卷等なり。故に正依は唯一「法華經」なりとす。唯一「法華經」に依つて一代の教相を判釋し、眞實教は唯一「法華經」なり。他は悉く方便說なりとす。上人は直ちに本門の實義を開顯して、事象の三千圓融を詳にし、台家の如く妄心必具の理想の三千圓融を對境と本佛開顯の事象の三千圓融を對境として觀法を立す。日蓮宗の教義に於て先づ其宗教の五綱中、第一教とは宗を立つる所以、第二機とは人を察する所以、第三時とは世に應ずる所以、第四國とは方を立つる所以、第五序とは變に應じ宜に適ふ所以なり。次に三應或は三大秘法と言ふは、一に本門の本尊、二に本門の題目、三に本門の戒壇これにして、心、懸及び身の研整する所以なりと。日蓮宗の本尊とは「法華」の壽量品に「成佛以來甚大久遠、壽命無量阿僧祇劫、常住不滅」と云へるもの之なり。上人之を布演して十界曼荼羅を圖し、中央に南無妙法蓮華經の七字を書して總體となし、無量の十界無邊の差別界は互具互融して、一大曼荼羅

の妙境たる旨を表はし、此曼荼羅即ち法華本門の本尊にして吾人の心にも常住なる者なりとす。これ密教の應用なり。本門の題目とは心を本尊に歸せしむる唱題なり。「妙法蓮華經」の題目は本尊の異義を攝して洩らす處なし。唱題すれば自然に本尊の影を生じ、遂に成佛の花を開く。本尊を定とし、題目を慧とし、南無妙法蓮華經と唱題するこれ本門無作の圓頓戒なり。人唱題して怠らざれば三惑も自然に亡び、諸佛の義善諸行を期せずして具足す。即ち現身既に成佛するが故に亦住處即寂光土なり。故に之を本門の戒壇とす。斯く三大秘法ありと雖其體唯南無妙法蓮華經なり。日蓮宗には又迹佛の教門に依りて本佛實體を知るが故に本迹二門を分ち、法華一部中、義十四品を迹門とし、後十四品を本門と云ふ。攝折二門とは攝受門或は悲門と云ふ拔苦の義と、折伏門又は慈門と云ふ與樂の義となり。

時宗　時宗は我邦最後の佛教宗派なり。一遍上人信濃善光寺に詣し、參籠數日の後伊豫に歸り窪寺に庵を結び、稱名の行に餘念なきこと三年、終に文永十年念佛の義旨を悟り、頌文を作る。

十劫正覺象生界　一念往生彌陀國　十一不二證無生　國界平等坐大會

上人此領解を得てより廣く此念佛の義を流布せんとし、先づ諸國の靈場に參籠し、佛神の力を請はんとして熊野權現に二百日唱念を凝らす。權現即ち念佛往生の趣旨を告げ左の一頌を授くと傳ふ。

六字名號一遍法　十界依正一遍體　萬行離念一念證　人中上々妙好華

上人領解の神勅に符合するを喜び、翌二年三月廿五日初めて一流を立つ。人身は無常なるが故に平生と臨終と異るなし。平生念々稱名を怠らざるを本宗の要旨とす。

新興佛教の傳布期(新興佛教の傳布)――北條氏執權二百年の後其治漸く衰へ、元弘三年終に亡び、鎌倉幕府も共に倒れて京都武家時代となる。鎌倉時代よりかけて京都武家時代は新宗教一般の傳布時代なり。足利氏の神佛に對する方針は尊氏直氏の兄弟逆を以て天下を取り、心中安からず。後醍醐天皇の崩御せらるゝや菩提と冥福との爲め天龍寺を建立せり。斯くて足利氏は佛教に對して强硬なる態度に出づる能はざりしかば、延暦寺、園城寺皆放縱にして東寺も足利氏と關係深かりき。神社は八幡宮を尊信せり。南北朝に於て最も有名なる禪儒夢窓國師は

七朝の尊崇を受けたり。後醍醐天皇元亨二年、虎關、元亨釋書を上り初めて我國に僧史の完全なるものを見る。應仁の亂までは禪宗表面の首腦たりしが、淨土宗には大德多く出て大寺成りて化導いよ〳〵擴布す。日蓮宗亦其門下次第に多く寺院建ち、叡山々僧と天台法華の名を爭へり。臨濟宗は益盛にして京都に鎌倉五山十刹模設せられ、夢窓國師に至りて極まり、終に禪僧政治上の顧問たるに至る。曹洞宗亦地方武人の間に傳播し一時其興隆を見たり。

神道獨立の運動――元弘の亂後元弘三年終に後醍醐天皇を奉ぜる勤王軍、北條氏を亡ぼせるも建武中興の頓挫は遂に永く武家の權力を確立せしめ皇室衰退の時代となり、鎌倉武家時代の守護地頭の制度次第に破壞し去りて、遂に戰國時代に至りては純然たる封建制度を作るに至る。南北朝の初め北畠親房は南朝の柱石、勤王軍統一の中心となりて國民的信仰の復興鼓吹を計り、後村上天皇の興國元年、神皇正統記を上り、神祇皇祖と皇室との關係より天皇の神聖なる所以を歷史的に說き、南朝の正統を論ぜり。又「元々集」「東家秘傳」等を著はして獨立神道振興の卒先者となれり。「元々集」は神道の諸傳說を纂めたる者にて、別ちて第一天地

開闢篇、本朝造化篇、神皇紹運篇、第二、天神化現篇、第三、地神出生篇上、第四、地神出生篇下。第五、神器傳受篇、神離建立篇、神國要道篇、第六、內宮鎭坐篇、第七、外宮遷座篇、第八、御遷幸指圖とす。「東家秘傳」は親房の神道說を正面より說けるものにて、神代卷の本文十箇條に準じ十箇の條目を立つ。其所說、古道の傳說を陰陽五行の理又五大(地水火風空)等の思想を以て說くこと巧妙に、神話傳說九箇條を玄妙なり、深意あるべしと觀、次て古傳の道德觀念に自然宗敎的敎理的又道德的なる發達をなさしめ、佛敎儒敎道敎皆共に身を修め、心を正し、知を致すの道を說くに於ては一なりと觀たり。さて第十條に「治世要道、神勅明分也」として「元々集」の神國要道篇と同じ說をなし、治國の要道は正直、慈悲、決斷の三を出てず、內外の典籍亦此三に過ぎずと說き、以て國本を闡明し、祭神尊皇の古道を發揮せるものとす。且つ斯くて我國は神國なれば儒佛のいへる處凡て呪に包含せられ、而も其理一層明瞭に現はる。萬古不易の道理我國神道に存し世界に類なしと說き、三種の寶器と三句の要道、この道を表はせるものとなす。其所說の精神、國本を明にし、祭祖尊皇の古道を敎へたる狀神道史上の偉觀にして又古道の歷史的、道德的發達を表はしたる

點は、親房の神道說に於ける發達として認め得べし。去れど成立的宗教思想及び哲學的道德教と習合せる結果、我邦祭神の國民的信仰と自然宗教的思想並に成立宗教との關係と誤りたり。親房の神道說は獨立神道の運動として異彩を放ちたるも、其前後のものは全く佛教に依りて掩はれ了りぬ。親房以後の神道說は室町隆盛期の末足利義教、義政頃の人、一條兼良の兩部習合說に依れるものゝ外、唯僅に忌部正通の「神代口訣」等ありたるも一も見るに足るものなく、室町時代の末葉衰亡期に唯一神道の出づるに至る。

五山の沿革と儒學勃興の淵源——南北朝以來京都武家時代は文教衰退期にして文學は禪宗五山の文學の隆盛に依りて代表され、其命脈を保たれたり。去れど此時代の終には復興の氣運橫溢せんとして、當時の文學は江戸時代文學隆盛の淵源となれり。これ恐らく義滿の相國寺建立の結果なり。五山の禪僧又政治上の顧問として任用されたる者少なからず。五山文學は鎌倉時代よりして其端を開ける禪僧文學が、南北朝より室町盛世期にかけて空前の隆盛を極めたるものなり。寧一に起原し夢窓國師に大成されたる者にして殆ど純支那的の文學なり。而

して應永の前後に大體詩文時代と註疏時代との二期に分る。註疏時代には益〻朱子の學風等が鼓吹せられて江戸時代、儒學勃興の源泉となれり。斯くて儒學の持續と再興とには僧侶の功與りて力あるなり。室町時代文學の主なるものは五山文學なるが之と共に關東の文運を代表する足利學校と金澤文庫とあり。

應仁亂後佛教の狀態——應仁亂後京都の寺院大半灰燼に歸す。此亂後即ち文明五年以後は室町衰世期にして、天正元年足利氏の滅亡に終る。此間國々騷亂の獨となり、幕府の令制殆ど行はれず、諸侯は弱肉强食の狀にて百姓安堵の暇なく、且つ饑饉となり疫病流行す。室町衰世期は所謂戰國の世にてこの間皇室の衰微甚だしく諸儀式も停廢せり。眞宗は中興の祖蓮如上人、文明三年一宇を越前吉崎に建つるや、出羽奥州の諸國に至るまで老若男女來り集ふ。時に國司富樫政親專修の徒を惡み、滅ぼさんとせるに始まり、一向一揆の騷擾遂に石山の戰を致して顯如上人に至る。文錄元年十一月京師六條に今の本願寺の基成る。亦法華宗は寺院燒滅して却て宗義學興隆の因を得たり。斯くて眞宗、日蓮の二宗は此時代却て後年隆盛の基礎を成したり。元龜元年叡山、信長に燒かれ山門一時滅亡す。關東の佛

教は舊に異るなく淨土門振興せり。獨り禪宗は勢力既に亡びんとす。宗門を敵とせる信長の後に出でゝ秀吉は人心收攬の必要より、諸社寺の領地を安堵にすると共に叡山の再興にも盡力せり。又天正十四年頃奈良の大佛に倣ひて京都に大佛を造營せり。

唯一神道說——室町隆盛期の末より衰亡期、文明年間にかけて吉田神社の祠官卜部兼倶唯一神道を唱へ、親房の後兩部神道等の羈絆を脫し佛教に對立せんとして一種の勢力を得たり。卜部氏はもと龜卜を務としたるが吉田社の神官となりて次第に增長し、幾多の神書を僞作し、兼倶謂所唯一神道を大成す。唯一神道の儀式には神道護摩、宗源行事、十八神道あり。是等を兼ね修するを秘事とす。古道其ものゝ眞意はもとより謂所神道說としての敎義の上にも見るべきものなし。僞作「唯一神道名法集」に「神道は隱密にして極めて深し。神道には相傳、傳授、面授口訣の四重あり。又影像、光氣、向上、底下の四位あり。其宗敎的方面には三種大祓とて、

吐普(トカミ)、加身、依身(エミ)、多女。　寒言神尊(カンコンシンソン)、利根陀見(リコンダケン)。　波羅伊王意(ハライダヤヒキ)、善余目出賜(ゼンヨメデタマフ)。

三種の神言てふ呪を擧げ、兼倶「中臣祓抄」に「三種と云ふは、天人地の三才の大神呪

なり。日月星の三光の稱號なり。天子三種の靈寶の精氣なり、秘中の深秘これなり」と說き、後吉田定俊は「唯一神道祓三部抄」に「此祓の功德利生は……最も有難き御祓の德用也。……されば、にや、三世安樂(高天原の神世、豐葦原の人世)三世常住(父子孫世)の神呪とも申し傳へぬる者なりし。神人以て相和し祈願にて成就す……即ち此祓を唱へて行住座臥に修行し、こゝを以て祈る事久しからば、などか神慮の御內證にも合はざるべきや」と讃嘆し、形式上一種宗敎的に進めたり。これ亦神道をして一の成立的宗敎の形體を備へしめ、以て獨立せしめんと努めたるものなり。兼倶の子九江亦唯一神道を扶けぬ。

カソリック敎の渡來と弘布——天文十年(西曆一五四一)フランシスコ、ザビウェル薩摩に來りて、ジェスイット派の耶蘇敎を傳ふ。これ耶蘇敎最初の渡來なり。時は恰も戰國時代にして九州中國より京都附邊に傳道し、其信者諸侯の中にも大友、有馬、大村、黑田、小西、石田、高山等あり。細川忠興夫人の如きも信者にして關が原の役に死を潔くせりと日本西敎史に傳ふ。天正十年大友、大村、有馬の三侯、使を羅馬に遣はし羅馬法王に謁せしめ、使者天正十八年歸朝す。信長政略上より耶蘇敎を保護し、

布教の便を與へたるも傳道の結果不穩を醸せるより、秀吉に至りては、天正十五年耶蘇教禁止の令を下す。去れど宣教師中にも窃かに隱れて歸國せざるあり。此後も信者となれるもの少なからざりしが如し。

五　佛教の沈滯と神儒兩教の興起

時代精神の變化と德川幕府の宗教政策――慶長五年關が原の役後、戰國時代の末を受けて德川家康遂に政治上の中央機關を江戸に移し、こゝに將軍政治を開く。斯くて鎌倉時代以後の時代精神沈定すると共に、新時代政治上の制度と相俟つて時代精神變化し來れり。さて茲に一時期を劃する江戸武家時代の宗教はもとより此期の時代精神の結果なるも亦此時代の政治上の制度、換言すればこの制度より出でたる宗教上に於ける施政の方針と相俟つて見ざるべからず。此時代の政治上の制度は、德川幕府が古來の武家政治を發達せしめたる平和的なる

中央集權的封權制度なり。江戸武家時代の文化の中心たる文教興隆の趨勢は、初め文藝興隆期(四代將軍家綱より七代家繼まで)を劃して幕府の政治即ち如上の制度と交渉して、儒者政治とも云ふべき時代を現はし、以て德川幕府の守成期を成せり。德川幕府の建設に依りて武家の爭亂止み世は太平となり、又其施政は宗門の爭擾をも靜めぬ。偖、宗教に對する幕府の施政は、家康の天下統一と同時に其方針定められ、先づ佛教各宗派を平穩にし、佛教を以て間接に公家を制し、又耶蘇教を禁制し、治國平天下の道は儒教の仁義に執りて之を中心とし、且つ儒者を政治に任用し以て佛教徒を抑ふるとこれ幕府の政策たり。之に依りて幕府は先づ人民の宗門改めをなし、大に宗門を優遇して領地と空位を授け、又公卿法度、諸宗諸寺の法度等を定む。同時に儒教中心主義より學校の建設、書籍の刊行、聖廟建設に又は釋奠の舉行等に依り大に力を文教の振興に致し以て治を固めんとせり。神祇に至りてはそは日本開闢の祖神を祭り、國家安全の守護を受くるなりとして尊崇し、祭祀の滯なからんとは期したるも時代の神道思想の狀態は以上に深く思惟せしめざりし如し。唯社寺奉行を置きて神社を總括し、僧侶を其別當として

神佛混合の制を繼續せり。

江戸武家時代の宗教(耶蘇教禁制と天草島原の亂)――耶蘇教は既に秀吉の時禁制せられたるも、宣教師、なほ諸國に潜んで傳道するものありき。德川の世に到りても依然貿易を續くるより外教の侵入も全く除くと能はず。幕府は慶長十六年以來幾度か禁令を發したるもその効なかりき。然るにわが國との貿易上和蘭人は葡萄人を敵視せしかばジェスイット派は從來法の爲めに國を制すと密告す。茲に幕府は斷然鎖國と決し唯和蘭に通商のみを許しわが國より外國への渡航をも嚴禁せり。然るに關が原役以來の浪人の民間に下れるものゝ不平と、耶蘇教禁制に對する人民の宗教的熱心との結果は天草の亂を釀すに至る。三代將軍家光の時、寛永十四年小西行長の浪人等潜に切支丹を信奉せるものを煽動し、島原城主松倉氏の治亂れたるに乘じければ、百姓これに應じて反亂猖獗を極め、天草と相呼應して松倉氏の兵を破る。これ天草島原の亂なり。其勢強く事態益〻容易ならず。遂に九州大名の總攻擊に及びけるが、後漸く翌年二月の末城陷れり。之より幕府益〻耶蘇教の禁制を嚴にし、年一回諸大名をして人民の宗門を改めしめ種々の

手段を盡して絶滅を計りぬ。爾來嚴に鎖國の主義を行ひ、わが國は獨り太平の夢を樂むことゝなれり。

佛教の狀態――耶蘇教禁制以來、宗門改、信佛奬勵等に依りて佛教は外觀上全盛時代となり、時代精神と幕府の施政が與へたる安泰と相俟ちて信仰沈滯せるため佛教の大勢は腐敗漸く甚だしくなれり。殊に高野山の學侶行人の爭は永續しぬ。されば此間に各宗教義の研鑽訓詁は盛なりき。後光明天皇承應三年、明より隱元禪師黄蘗禪を傳へ來りて佛教界に一時清新の氣を持ち來し、信仰する者甚だ多し。去れど幕府に尊崇せられ利用せらたる僧侶的外觀的佛教の弊甚だしく、遂には幕政の上にも害毒を流しぬ。隱元禪師の法孫鐵眼一切經の開版を企て、十餘年にして業成る。黄蘗版藏經これなり。日蓮宗の不受不施は遂に禁ぜられ、眞宗には寛永年間に本願寺の學林を創設し宗學隆盛に赴きしが、三業惑亂て上安心の論生じぬ。

德川時代文教勃興の趨勢(朱子派の德教)――宋學曾つて多く五山の禪僧に依りて傳へられけるが、德川幕府成りたる頃五山の承兌、靈三等を始め、足利學校の三

要、薩摩の南浦桂菴及び土佐の南學派即ち南村梅軒、其門谷時中、時中の門下野中兼山等相前後して大に宋學を唱道し、初めて家康に用ひられたる藤原惺窩は近世儒學の祖と稱せられ、惺窩より我國の朱子學勃興せり。

宋學の要旨　日本に行はれたる宋學は大要支那のと同じなり。朱子學は其目的とする處、支那教學の通有性たる道德の完成にあり。朱子が「人之所以爲學心與理而已矣、雖主乎一身、而其體之虛靈、足以管乎天下之理、理雖散在萬物、而其用之微妙實不外乎一人之心」云々と云ふ如く、學問の目的は致知の心と格物の理とのみ。即ち心と物理とを學び、德行の法則を得て道德を完成するにありとなし、この趣旨を世界觀より始めて說くなり。即ち宇宙間に萬古不滅の一理躰ありとし、之を太極又は無極と名づけ、即ち有と無とを立てゝ、是等二にして一、一にして二なり。且つ形象、方所もなく自動して息まず、大極の分派に依りて陰陽交錯し、五行頒布し、四時循行し又萬物交感化生ず。人は此分派中殊に秀靈なる者、太極の理に順へば善、これに反する者は惡なりと說く。又理と氣、躰と用、即ち實躰的觀念と現象とを區別す。而して格物究理を重んじ「盡己心」則能盡人盡物」等云ひて事物を究むるとを力め、また心と性即ち理の考察を致し、大に經驗を重んずる傾向あり、原始的なる形式の倫理哲學なり。

惺窩は江戸時代の儒學興隆の原動力たり。惺窩の門、林羅山(道春)を初め松永昌三(尺五)堀正意(杏菴)那波活所(菅得菴)石川丈山等學者多く、此學派を京學と稱す。即ち朱子學派なり。惺窩の學の要は、天道、人道共に根底に於ては同一にして宇宙に普遍なる理に歸す。即ち唯此理を天に就きて云へば道、人に就きて云へば性となすに過ぎず。人其性に順へばこれ理に順ふ者即ち天道に順ふ者にして人天一致す。故に人精察の工風を凝らして天道に順ふべしと說く。惺窩は明かに程朱を承ぎ乍ら陸象山を混じ、更に儒禪の道豁然の境に到れば、知足と解悟と一致する者なりと考ふ。斯く彼は純粹なる朱子學者ならず。我國に入れる朱子學は早く既に變化せるなり。林羅山は德川氏の正學たる朱子派の重鎭にして子孫世襲し、門人多く之を林門と稱す。兼山と時を同じうし東西相應じて朱子學日本に勃興せり。惺窩に於ける朱子學說の不明なるに反し、羅山は純一なる朱子學を唱ふ。曰く「其夫子之道在六經、解經莫粹於紫陽氏(朱熹)羅山は陸王等の說を儒佛混合として斥く。

其大極、陰陽、天命、心性に關する思想大抵宋學に一致す。

聖人之道者……在君臣父子男女兄弟朋友之間。所以行之者五常也。五常者元在於一心。此心是性也。人々共所依者道也。得道於心之謂德。故道德仁義禮智其名異而理一也。

羅山は、道はこれ人倫を敎ふるもの、人倫の外に道なし。然るに陸王、老莊、佛耶共に世道を無視すとす。然し彼亦理氣一元論を執りたることゝ、敬は神明に合する所以、王道は即ち神道なりと儒神を同一に觀るに至れることゝは注意を要す。

文藝復興期の狀態――文藝復興期は文治派の施設の結果世は太平を樂むと共に武道廢れたれど文學勃興し、有名なる學者輩出せり。家康以來幕府の顧問となり文敎の權を握りたる道春は家綱の初年まで在り。道春の子鵞峯家學を嗣ぎぬ。羅山と時を同じうして中江藤樹創めて陽明學を唱ふ。藤樹門下に學者にして政治家なりし熊澤蕃山出づ。蕃山は道春の幕府本位に對し京都朝廷の貴ふべき所以等を說く。之と同時に土佐南學より出てたる朱子學派の山崎闇齋亦、儒敎の外我國の大道あるを唱へ、神國論を唱へ一轉して儒敎を以て神道を說きたる所謂

垂加流神道を創唱し、門下俊才多く公卿縉紳の間に尊王主義の根底を作る。闇齋は家綱の輔佐たる保科正之に信任せられる。わが國の神道新氣運に向ひ幕府に神道方設ける。光圀の學風は所謂水戸風の學問となり、幕府の親藩たると共に皇室の尊ぶべきを敎へたり。天下を風靡せる朱子學に向つて先づ論難を加へたりしは山鹿素行なり。素行は山鹿流の兵法を敎授し傍ら經學を究め其識見また時流を拔く。聖敎要錄を著はして朱學の定理にのみ拘泥すべからざるを論じ、又武士道の皷吹に與つて力あり。其外江戸にも京都にも有名なる學者多く、松永尺五の如きも其一人にして門下に木下順庵あり。經義を貴び朱子學を墨守し、異義を立つるものを攻擊す。順庵の門下新井白石、室鳩巢等殊に俊才輩出せり。同時に江戸に荻生徂來、古文辭學を唱へ、服部南郭、太宰春臺等の門下ありて盛なり。又京都に伊藤仁齋、古學を唱道し、東西の偉觀たり。儒界異說紛出せしかば、遂に寬政年間松平樂翁公老中となり幕府政弊の改革を企て、先づ德育の基本を一定せんとし栗山、二州、精里等の朱子學者を擧げ林家を加けしめしが、他學派、學制を難じて騷然たるより終に斷然異學を嚴禁す。林述齋林家中興の名儒と稱せらるゝも朱子

學派は既に雜然たるものとなりぬ。

陽明學派の德教――中江藤樹に依りて王陽明學派唱道されたるも支那のそれと大に趣を異にす。王陽明の學は陸象山に基づき、王陽明の知行合一說は象山の心即理の觀念より出でたりと云ふべく、一元的世界觀を有し究理と實踐とを結合し、心を以て學問の第一義とす。直截簡易にして「求理於吾心」此聖門知行合一之敎」「知之眞切篤實處、便是行。行之明覺精察處、便是知」と云ふ。知行合一に至るべき途につきて善惡を識知する良知を認め、之と意と行とは畢竟同一躰なりとす。王子が朱子に對して學說の相異する根本の主要點は朱子は嚴しく心と性とを正別するに反して王子は心は性なりと解する處にあり。性につきては共に理なりと解す。王子曰く「心之躰性也、性即理也、心即理(物理)也」而して「物理不外於吾心」又「學者學此心也」と云ひ、良心の上より人倫の道を知り且つ行ふことを旨意とせるなり。

藤樹の學說の大要は陽明の學說と異らざるも、藤樹は天地萬物を作る神ありと信じ之を天太一尊神等と稱す。而して之を「其全躰充塞於太虛、而無聲無香。其妙用流行於太虛、而至神至靈」と說き而もこれ我心良知又明德なりと云ひ天人合一說

を立し、且つ良知の異名として神明、眞吾、天君、悅樂、光明佛あり。王陽明の虛靈明覺、常住不變の義を宗敎的に化せり。其外因果應報を信ずる等其所說宗敎化せるも本義は倫理を重んず。又孝を以て「天地未畫の前にある太虛の神道なり」等と說き王學を日本化せり。王學派には省察、事功の二派あり。省察派は藤樹に始まり中根東里、佐藤一齋等輩出し、事功派は熊澤蕃山に起り大鹽中齋、横井小楠等これに屬す。多くは藤樹を繼承し益日本化したり。

復古學派の德敎――素行は他に超然として復古學派の鼻祖となる。即ち一に經學に依りて孔子の敎を闡明せんとし、學必ず唯周公孔子の書に依り、聖人を師とし、聖學の筋を正し、明かに得心すべしとす。德學の目的とする處は、

聖學之筋は身を修、人を正し、世を治平せしめ、功成名遂候樣に仕度候。此學相積ときは智惠日々新にして德自高く、仁自厚、勇自立て、終には功もなく、名もなく、無爲玄妙の地に可至、されば功名より入て功名もなく、唯人たるの道を盡すのみなり。

而して此德敎の根本として立つる世界觀は、陰陽あるが爲めに表面には消長往

來あるも、本來は世界に形體の始終なく、至大至廣なりとす。素行の復古主義が先驅となりて伊藤仁齋の古學說、物徂徠の古文辭學派相前後して起る。

伊藤仁齋も後年、宋學は佛老を和し私見を以て解說したるものなれば直接孔子の言行を錄せる「論語」に據るべく、こは「萬世道義之規矩準繩也」とし孟子を以てそが註脚なりとなす。學問は道術を明かにし德行を立つることを目的となし、道は平易卑近なるもの朱子の如く學理的ならず又王子の如く心學的ならずとす。而して天地を以て一大活物とし、一元氣を以て其本源なりとなす說は、仁齋の本領なると同時に亦古學派の主腦なり。其後繼者益〻實踐道德主義を重んじ、實學を貴び所謂堀川流の學風をなし、古來の正學を去りて孔子の學を闡明せんとし、儒學の一大變革を開きたり。

荻生徂徠、仁齋の古學說に對し古文辭學を唱道す。徂徠後、朱子派を貶し晚年に至りては子思孟子までも攻擊し、古語によらずんば古意を得ずとせり。先づ「道者統名也」と說き、「孔子之道者、先王之道也。先王之道者安天下之道也」。道の眞髓たるものは禮と樂との二なり、五倫の如き其一部に過ぎず。禮樂を以て天下の民を治め行

くこれ仁なりと說く。然るに徂徠の學說は以て五經にも通じ得ず、又個人の道德を無視するに至るとの誹を受けたり。去れど古文辭學は古學派よりも經驗的、實際的にて全く政治的なり。徂徠門下には僅に太宰春臺あるのみ。春臺は徂徠と異りて禮法、德行を重んじ徂徠と仁齋とに對し折衷的態度を持せる如し。

折衷學派と考證學派――以上諸派の外に折衷學派と考證學派とあり。折衷學派は木下順菴の門より出たる榊原篁洲に胚胎し、井上金峨と片山兼山によりて開かる。篁洲は常に漢魏の傳註と宋明の疏釋を用ひ、訓詁は馬鄭の舊說に依り、義理は程朱の心性に依りて講ず。次て金峨、兼山の二人朱王伊物を混合し新機抽を出したりと稱す。金峨、當時儒界の學閥の弊甚だしきを矯むるに功あり。且つ學者をして比較考察の途に就かしめ、以て研學上に一新紀元を開けり。金峨について起れる儒者多く、吉田篁敦は師金峨よりも一歩進め、專ら漢唐の學を奉じて考證の學を創唱して考證學派の萠芽となり、先づ皆川淇園を出す。淇園は字源を究め精密に古義を明めんとす。錦城に至りては考證折衷を兼ぬ。兩派には大家尠なからず出てたるも涉獵穿鑿に傾き、亂雜なる綜合に陷り確固なる論旨を欠くの弊を

免れず。從つて學說の上に於ては貢獻する處なし。以上の外に神道、佛敎並に道敎と調和せる學說なされ來れり。

勤王論の興起 ——京都に於ては元錄以來公武の調和や有職古實等の觀念因となり、吉宗時代に隆盛となれる開齊一派に尊王論、大義名分論の種子培養され、之が實曆の頃此派の學者にして垂加神道を修めたる竹內式部等に依りて發芽せり。時を同じうして山縣大武江戶に勤王論を唱へ又水戶學派あり、更に外國との交涉始まるに及んで勤王論華き、遂に明治維新に至り王政復古の實を結ぶなり。斯く一方に於ては京都及び江戶に勤王論の皷吹者現はれたり。

國學と神道の復興 ——學問の隆盛は亦國學復興の機運を致せり。大坂に僧契仲あり。萬葉集古今集の註釋を著はし、古語の研究を開き國學復興の祖となれり。元祿時代の契冲の後、祠官荷田春滿京都に於て古典の研究を唱ふ。春滿は神佛合一に、平かならず。國學は斯くて先づ上都に於て勢力を占めけるが、春滿の養子在滿江戶に來りて將軍家重の弟田安宗武に仕へたるに始まり、眞淵に至り江戶の國學益〻隆盛となれり。眞淵は漢をも排斥せんとし、眞淵の門下中、本居宣長最も國學に貢獻す。宣長國學に志してより遂に古事記傳を公にし、古語の解釋を全うし、宣長に至りて儒敎中心に對する反抗大に現はる。而して神道を皷吹しわが古道の復興の中心となれり。宣長の門弟甚だ多く、沒後の門人平田篤胤は專ら神道の皷吹者となれり。春滿眞淵、宣長、篤胤の四人は師承する處あり、國學の四大人とせらる。群書類從の著者塙保己一、伴信友、小山田與淸等皆博覽の學者なり。儒敎中心の影響は佛敎にも及びぬ。

當時、文藝趣味は下層の人々にも及び、この時代の一特徵たる平民文學の發達を來し、且つ儒敎中心の潮流は文學界にも及び、瀧澤馬琴の小說に於て大成されたり。文敎の隆盛に伴ひて修史事業勃興し、林信勝等の「本朝通鑑」水戶の「大日本史」等の官撰成れり。其他當代の史家白石の讀史餘編又中井竹山の逸史、飯田忠彥の野史等最も有名なり。

神道復興の諸派(德川初政の神道と羅山並に吉川惟足) ——德川時代神道は初め弘法の兩部神道と吉田の唯一神道とが傳はりて依然神佛混合し居りたり。神道の有職は白川家及び吉田家とせられ、兩家は佛敎と分離せる神道を確立せんと

し屢、僧侶と爭論せり。神佛混淆の內より第一に混淆排擊の聲を擧げたるは林羅山にして、神社考を著はし日本は神國なりと說きぬ。神社考の一節に曰く「われ吉田家の說を見るに、彼兩部習合の說を剽み掠めて、以て己が說となしたるものぞ」。然るに又吉田家神道の庶流、荻原乘從の弟子、吉川惟足は宋學理氣說の社會を風靡せる時、吉田家の神道を究め理氣說を以て道德的解釋を下し、「神道は今日五倫の敎を以て道を立つ。五倫は君臣の道を以て本とす。伊弉諾、伊弉冊の二尊は天地開けし始に氣化し給ひて人倫の道を立給ひし時、君臣の道を本として御子天照大神を以て此國の君と仰ぎ、君臣の禮を正し、夫より父子夫婦兄弟朋友の理を敎給ふ人皆君臣の道を守る時は五倫の理は自ら行はる。」と說く。朱子を奉ずる林家の學盛にして他の學を學ぶを許さざる時に方り、神道を唱へて會津正之を信服せしめ、將軍家綱に徵されて幕府の神道方となる。而して唯一神道を講じ皇風を挽回するに力ありき。

社家神道又は外宮神道 —— 惟足唯一神道を說き勢力を得たる頃、伊勢內宮外宮の社家は敬神の大道を興し、祭神の儀式を嚴にして純粹神道を發揮せんと企て、

外宮の神官度會氏が中心となれる一派、社家神道又は外宮神道と稱せらるゝあり。其聖典神書となすものは「神道五部書」と稱するものにして、假託の作と認めらる。外宮に祭り給ひたる國常立尊は君臣兩祖たる天御中主尊と同神異名にして而も君祖たりと說く。外宮神官出口延佳淡意を以て古傳を說き、殊に大極陰陽の儒說を以て神代のことを說き一種の神造說を組織せり。

垂加神道 —— 社家神道に次て山崎闇齋の垂加流神道起る。闇齋は朱子學を崇び惟足と延佳に專心神道を學び、遂に新神道說を起せり。靈社を京都上御靈神社の中に建て神道の發揮を以て任ぜり。垂加の名は神宣に「神垂以新齋爲光、冥加以正直爲本」とあるより來る。其說、社家神道と唯一神道とを折衷し、程朱の居敬窮理の說を用ひたるものなり。その大要は「垂加文集」に、

伊弉諾尊、伊弉冊尊、順陰陽之理、正彝倫之始。嗣之天照大神以三種神器治海內、夫神者天地之心、人者天下之神物。蓋天人唯一、而其道之要、在士金之敎而已。土卽敬也、土與敬、倭訓相通。而天地之所以位、陰陽之所以行、人道之所以立、皆出自此。

宗敎的なる方面に於てはかの「三種大祓傳」にて唯一神道の三種祓の宗敎的にな

れるを更に宗教風に化す。「三種大祓傳」に「一身の惡穢をはらひ捨てゝ、赤心にならざれば神に交はり難し。よつて……祓をして黑心(キタナキコヽロ)を去り赤心になりけると、神に告ぐる詞なり。吐普加美は瓊矛鏡(ホコカヾミ)なり……之を以て三種の祓といふなり。……祓ひ賜へ清めて賜ふ、皆神にうちまかせたる詞……なり。神明の御心に三種の神器の如く、玉の德を備へ鏡の智を以て諸の惡穢を矛を以て祓ひ去り、法淨麗々たる御心により……よく見玉へ、四方四隅のこる所なく祓ひ清めてたび玉へと、身心共に祈る時は、諸の惡穢を祓ひ清めてたびたまふと也。」と說き更に「拍手傳」にはかの祠文を「毎朝三たび唱ひて拍手二つ打つべし、……神明感應を仰ぎ登むことなり。」闇齋は愛理と持敬即ち土と金とを要道とし、深く猿田彦神を尊敬し、「道は大日靈貴(オホヒルメノムチ)の道にして、教は猿田彦の教なり」と云ふ。闇齋は或る意味にて神道中興の人たり。其影響後の新神道を組織せしめ又政治界にも波及しぬ。儒教的神道は垂加流に至りて天人合一の理を以て神人合一の說を立て、敬以て天に一致する所以これ即ち神に合同する所以なり。理と敬これ實に天地至德要道なりと說き、一種の道德教と化せしめ、神道これより道德說として立ち儒教に對峙するに至れり。

垂加流神道に對する貞丈の評語安齋隨筆にあり。この一派(垂加神道)は神儒兩部習合とて世に盛に行はる。伊勢の神主出口延佳なども同じ徒なり。此兩部習合も人の教の端にもなる事なれば、惡事にもあらざれども、眞の神道にはならず。眞の神道は神祇を祭る道より外に別の事にてなし」と。

復古神道の興起――神道に初め手を下せるは僧にして次に儒者儒教を以て神道を說きけるが、國學の發達は亦神道に及び古語の研究發達せるより、今や國學者に依り古語を以て古典說かれ、其意現はさるゝに至りぬ。即ち垂加神道說の方法稍考證的なりし傾向と古語の研究とにより茲に復古神道の興起を見、古道本來の面目現はさる。

復古神道の門戸――名古屋東照宮の神官吉見幸和、契仲につき古學の蘊奧を極めしより神道の眞義を闡明せんと志す。儒教を以て神道を說くことに反對し、國史の文を引用して先づ外宮神道の妄誕を、次で唯一神道の虛僞を批判し、卓見を現はし以て復古神道の門を開く。神代卷を全然歷史なりと解けり。契仲前後國學の諸大家出て古語、古史の研究いよ〳〵盛り行き、我古代の眞相漸く明になり、水

戸には大日本史の編纂始められ、且つ外國との交渉始まるに及び國家的觀念喚起さるゝに至る。

考證的復興――如上の氣運に際し神道をして純粹の古道に復さしめんとする者出づ。京都稲荷神社の神官荷田春滿は契仲、季吟の釋に據りて極めて考證的に神道を説明し、國學を鼓吹し以て儒佛に對立する程に至らしむ。春滿が嗣子在滿亦古學を擴め、古禮を興し、又古道を闡はし遂に神道の獨立を主張し、復古の氣運大に熟し來る。伊勢貞丈「神道獨語」を出し、齋藤彦麿は「神道問答」を作る等皆考證的に神道を研究し、之を國家の大義なりとす。唯一垂加の兩神道説はその典據神書ならず、亦兩神道家が固執するトホカミ大祓も龜卜の辭にして祓除の詞ならず。兩の神道共に眞の神道ならずと斷ず。

天野信景は「鹽尻」に曰く、

「神道の字、我が帝紀をかんがふるに、佛法に對していへるのみ。後に世のごとくことく〳〵しく秘訣と爲るが如きにあらず。たゞ倭語にかみのみちといふを漢字になしたるばかりなりといふ人ありむべなり。但し神道と云ふ字は同じけれども、今いふ處と意味ちがふ事なり。帝紀は神事に付ていへり……只道といへば人倫の大路貴賤ともに行ふ理なり。」「吉田家にて修する所の神道護摩供は吉田兼俱が子の九法僧が始めた」

貞丈の説に、

「神道は神祇を祭るの道なり。朝廷の祭法あり諸社の祭法あり、皆古法を守つて改めず。是より外に神道と云ふことは有べからず。上古朝廷有無にして雜事多からず、只神祇を祭るを以て一大事としたる故に、政の字を訓してマツリゴトと云ふ也。然るに神道とて人倫の教を立て正直と云ふ事を宗旨として、五倫五常の道及び土金の傳とて敬の字を守る事などを説き変ぜたるは後代のこしらへ事也、是神儒兩部習合の神道也」

又「我國は儒佛の外に神道と云ふものはない、ないものはなしにして置てよい」其他「吾國上古の書に日本を神國と稱することなし。但し日本記神功記に東有神國」謂日本と見へたり。此神國の神の字は……褒美したる詞なり。……美稱なり。」

又安齋隨筆に、

「中古以來の神事と云は、正直の二字を宗旨として、神道の敎の道なりと云ひ、三社託宣と云僞作の文を本經にしたる敎なり。… 三社託宣の詞佛者の口氣ありて穢はし。兩部神道と云者の僞作なり。又神令（一條禪閤兼良公著）といふ書あり。是最も神敎の道なりと云ふて、儒道を以て敎を書き、僞作したるものなり、信ずる事なかれ。」

復古神道の大成 —— 後、在滿の高弟にして「萬葉考」を始め「國意考」「祝詞考」等を著はしたる岡部眞淵古語を以て神典を說かんとせしが、高弟本居宣長に及んで「古事記傳」を成す。又「直毘靈」を著はし漢意を以て神典を說くことを排斥せり。服部中庸亦「三大考」等を著はして共に古意を明す。就中宣長は春滿並に眞淵の說に基づき復古神道を大成したり。「直毘靈」に「神道は天地自然の道にあらず、其本は天地を創造せし天神より出でゝ、天照太神の伊弉諾、伊弉冊二尊より受け之を傳ふるに始まれり。而して其道に隨ふとは神代の法則に從ひ、毫も私意を加へざるを謂ふ。其は古事記」「日本記」等の書に依りて古言を尋ぬれば灼然として觀るべく、別に秘傳秘說あるにあらず」又「直毘靈」に「道は必ずしも學問して知ることにはあらず。生れながらの眞心なるぞ道にはありける」と。宣長は殊更に神道と云ふことを云はて古道學を唱へ、何事も古道の儘に行ひ行くが我國の傳なりとす。

復古神道の一轉 —— 復古神道家の最後に出てたる平田篤胤は、佛敎に對して史的論評を試みたる富永仲基の「出定後語」服部天游の赤裸々を根據として「出定笑語」を始め俗神道大意古今妖魅考印度藏志等を著はして、佛敎を攻擊せるも遂に其功なかりしかば、後年に至りては一心に神道の建設に務め、「玉襷」「鬼神」「新論」「古史傳」「古史徵」等を出し、「靈の眞柱」の著を以て其神道を成せり。其敎神官の間にひろがりて明治の世に及べり。其說の大要は天地開闢說を基礎とし、高皇產靈、神皇產靈二神が大本にて、此二神の成生の德により萬有成生せられ、世界萬國皆同一なりと說く。而して「靈の眞柱」に、

產靈神の產靈によりて成れることは齊しけれども、外國は二柱の神の產み給へる國に非ず、これ皇國と初より尊卑美惡の差別の分るゝ所なり。

即ち日本は萬國の祖なりとし、かくて支那の三皇印度の梵天王、乃至西洋のアダム、イブの造物主も皆我國の皇產靈神を申し傳へたるものなりと說く。天孫降臨

に於ける天照大神の大詔に就いて、

實は速須佐之男命に青海原、潮の八百重を知らせと、伊耶那岐命の依したまへる御言もこもりて……此を思ふにも我か天皇命はしも、……百八十の國々を悉くに知ろしめすべき大君に坐すこと灼然たり。

と言ひ、之に依つて「皇室は萬國の主なり」と稱ふ。又皇產靈神の大詔に基づきて「靈の眞柱」に、

その御依しませる天祝詞の大詔事と申すは、世の初發よりの故事を皇產靈神の大御口づから傳へまして、其故事の詔の儘に政賜はむ狀をも依し給へるを云ふなり。さて皇御孫命の御代々々、其皇產靈神の御依しませるまに〳〵己れ命の御さかしらを交じへ給はず、政賜ふを惟神の道とは云ふなり。

とて「神道は萬國の道なり」と云ふ。即ち「天地の初より神々のなされた事が即ち吾が徒の神道にて別に教の何のと言擧げせぬが、御國の本體ぢや」と云ふ。神代よりの神々の古史の事蹟が即ち道即ち教なり。之に道理を附すれば習合說となると說く點に於ては宣長等も其主張を同じうす。畢竟神の產靈によりて生成せられたる本性の自然に隨ひ、單純素樸なる眞心を持ちて上位の者は治世の善政を施し、下位の者は忠君愛國の誠意を盡くすと、これ人間通常の大道なり。篤胤俗神道大意を著はし、從來の神道は皆世俗のものしてわが神道獨り眞の神道なりとて行基、最澄、空海及び吉田家を難ぜるも、その云ふ處道春、幸和、信景、點丈及び定長等の說を襲ひたるのみ。

重遠、篤胤等の神道說の本義と典據――後世に云ふ神道の本義は谷重遠、平田胤篤等が孝德天皇大化三年の詔の「惟神」なる言葉の註文「惟神者、謂隋神道、亦自有神道也」と云ふ、兩の神道これ後世に云ふ神道の本義なりと主張せしによりて定められ來れるが如し。其詔の文は、

大化三年夏四月、詔曰、惟神、惟神者、謂隨神道也、我子、應治故寄、是以與天地之初君臨之國也、自始治國皇祖之時、天下大同、都無彼此者也、云々

谷重遠は書紀の疏解通證に隋神道云々を釋して、

言自有神道、故隨神道而奉行之也、夫自寶位授受際、以至於擧一事出一令及庶政萬機、惟神是聽、斯の乃惟神道矣」とあり。

又篤胤は俗神道大意に、

「此は……實によく我が古道の意を明したる語で、これが吾が徒の所謂神道と云ふ言葉の出所、據所ぢや」と云へり。斯くて後世惟神の註文は多くの神道家に依りて神道本義の典據とせらるゝに至る。

然るに惟神なる言葉は祝詞、萬葉に屢出て本居宣長が、

「天皇は現御神と申して、まことに神にましますが故、神にて坐ますまゝに物し給ふよし也」

と云へるはその本義を解したるものならん。即ち「惟神」は「神にて坐ますまゝ」と云ふ言葉なり。又河村秀根の書記集解には「言惟神我子孫、應治此豐國、故舉豐國使寄」「千子孫治焉」等と云ひ、かの詔の本註を以て後人の攙入となす。天野信景は鹽尻に曰く、「神の字を秘の字の意と見る事、いにしへより神家のふりたる名目にして、工妙加持經なんどいふ物を妄作し、四重の密意深秘の傳授なんどいふ事をおもひ仕出し口訣とせしかばかゝる事を神道といふはかへつてさも有べき事なり。只道といへば、人倫の大路貴賤ともに行ふ理なり。神の字を付て又人倫の道德なり

と、今の神道者のまげて辯作するはさもあるまじき事なり、……只中世佛理を物の尊きかぎりと覺えたる人々なれば佛書に只神道不思議なんどいへる文字よりいひそめけると見へたり」と。大化詔文の本註の攙入者を判じて重野博士はかの妄作多く、御師範として日本紀を講じたる卜部兼倶が唯一神道を唱ふるに當り、此攙入をなして神道二字の根據とせしものなるべしと論ぜられき。要するに大化の詔に於ける「惟神」の註のふさはしからずして攙入なるべきこと明かなるが故、に此註文を神道本義の典據となす事は誤なるべし。

水戸派の神道 —— 光圀以後水戸藩は別種の神道を奉じたり。水戸派の神道の代表者に推さるべきは藤田東湖にして、其大意は「常陸帶」に、

我君の神道と稱へ給ふは、……天地の初めより應神帝の御代まで異國の敎未だ渡り來らぬ時の樣こそ全く皇國の道なるべければ、即ち其御代の樣を神道と見たまふなり。

と說き祭政一致の古道を以て神道となす。佛敎を排擊せること篤胤等の所說と同じきも、水戸派は大に孔孟の敎を尊信し、孝道を以て忠君敎神の道に合せしめ、

わが建國の躰裁に忠孝一本の大義によりてなるものなりとし、「奉神州之道、而執西土之教」と言ひ儒教的神教を主張せり。

後古神道派には上の如き俊傑輩輩出し、神道の發揮、故實の研究に貢獻することの多かりしが社會に於ける勢力は未だ儒佛の上に出づること能はざりき。

新神道の興起――復古神道說の實際上の勢力は佛儒兩教の上に出づる能はざりしが德川氏の末葉に多くの所謂新神道興る。其中主なるものにして亦世に行はれたるは神習教、禊教及び一本教(黑住教)なり。其他神道派及びそれより分れて獨立せる金光教、天理教の外一派を成せるもの其數少なからず。是等は其派の祖となれる人の言行に依りて成れるにて古傳を傳ふれども、我邦古來の祭祀の道とは大に趣を異にす。德川時代になほ心學と云ふもの起る。神儒佛を調和し下層社會を教化せんとせるものなり。

復古神道の趨勢はそが殿將篤胤に及びて再び宗教的建設企てられ、遂にまた古道の眞意外に逸し、次で一種の宗教的運動として新神道起れり。而してこゝに至るまでの古來の神道史は其内に神道の本質の如何なるものかと其思想の制限とが現はれたるを見る。亦宗教問題上の國民信仰如何も、わが日本宗教史上既に充分解決せられ居るを見るなり。

我國武家制度時代の末期に於て、上下の國體上の自覺即ち古道の眞精神、國民信仰が、德川時代文教勃興の趨勢に伴ひて當代國家文教の中心となれる儒學者、國學者の精神を通じ、尊王論と現はれ神道の勃興を見、勤王の志士憤起して遂に王政復古の大義を致せることは實に動かすべからざる趨勢なり。唯斯かる國民道德の源たる精神の眞義、即ち我國家の歷史上に養はれ來れる國民信仰の眞意如何、またこれと當時行はれたる德教上の教義乃至神道說との關係如何。其他これ等の教義又は神道說が、人心の人生上の問題の解決即ち宗教的信仰に對して後に煩を及ぼさゞらん如く、國民精神上の自覺の勃興せるこの時代の宗教思想に就きて正當なる概察をなすこと、蓋し國民全般の宗教上には決して一時的の問題ならざるべし。一言すれば此時代の思想は宗教的了解を缺乏したりき。

神儒二道家の排佛論――儒教の勃興に依りて排佛論起り、儒教と共に神道說興りて亦共に佛教を排擊す。排佛論は殆ど一世の風潮をなせり。論難一歩を進めて

佛典上に一種の歴史的考察を下し、浅薄なる考證的見解を以て大乘は非佛說なりと唱ふ。是等神儒兩家の論、考證的なるものありて佛教習合に對する辨難は或る程度まで正し。去れど全體に宗教的了解を缺き、佛教そのものゝ批評としては採るに足るものなし。唯當時外形的佛教の弊風甚だしく、且つ佛家が宗教の性質を明かにし古來の歴史を說き、以て彼等に根本的反駁を加ふることをなし得ざりしなり。

六　新時代の宗教的覺醒の一警

明治維新と其以後に於ける宗教狀態――明治維新(西暦一八六八)の大業現はるゝや、わが邦武家制度時代の末期、佛教衰頽の時期に儒教的教化の内より生ぜる國民的自覺を唱導してそが成功を致せる幕末の神儒二家は、今やこゝに廢佛毀釋の端を開き、國家的宗教を建設せんと努めき。然るに明治元年先づ神佛判然の

令を下して朝廷、混淆の流弊を一洗し、八省の上に神祇官置かる。尋いて二年九月宣教使を置きてわが國家の大教の宣布を委ね、三年正月特に祭政一致の制を明にし、宣布大教の詔を下し給ふ。これ開化の施設に先立ちて我國特有なる國體上の祭政一致に復歸せる國是の基礎を國民に示し、以て皇道を復興せんとし給へるなり。詔に曰く、

> 朕恭惟天神天祖立極垂統列皇相承繼之述之祭政一致億兆同心治教明于上風俗美于下而中古以降時有汚隆道有顯晦矣今也天運循環百度維新宣明治教以宣揚惟神之道也因新命宣教使布教天下汝群臣衆庶其體此旨

朝廷の新施政を得て神道家獨り愈盛となれり。古來朝廷が佛教に對して與へたる保護は一切停止され、且つ改制に伴へる廢佛毀釋の打擊を受けて、佛家は各宗初めて一致の運動に出て、稍自家の革新に志す。明治二年京都に於ける道盟會組織、そが東京移轉後に於ける諸宗僧侶協同の法門研究、明治三年越前藩内の寺院の假學寮開始、更に四年東京に於ける各宗總發の設置等ありて各宗僧侶漸く自他の宗義を學ぶ端を開く。宗教制度上の急遽なる變動に依て一時佛家は打擊と

歴迫とを蒙りたるも、佛教は却つて茲に積年の弊習より脱して宗教的基礎の開放を得たり。更に國政が我國古來の祭神祭祖の道に復歸せることの意味だに知らば、佛教は維新の改制に依りて打擊を蒙むれりと思ふべきにあらざると同時に、若し國家の祭祀が成立宗教を拒まんとする特殊の神道説をのみ保護するものと思ふ徒のあらば誤なり。さて更に明治五年三月神祇省廢されて教部省建ち、祭祀は總て之を式部寮に移し、宣教に關する事務は一つに教部省に移る。次で四月三條の教則、第一條、一、敬神愛國の旨を體すべき事、第二條、一、天理人道を明にすべき事、第三條、一、皇上を奉戴し朝旨を遵守せしむべき事」を頒ち、國民の歸向する處を知らしめ、教導職十四級を置き、此教旨の宣布と人民の教導に當らしむ。去れどこはもとより神佛二教の弘通とは異り、歸する處は一に大教の宣布にあり。茲に於て佛家も神道家と共に教部省の下に大教宣布の任に與るを得て、維新後始めて社會上に位置を占むるに至れるは、打擊を蒙むれる以來佛家の熱心與りて力あり。斯くて神祇官神道省設置當時よりも佛教稍面目を改むるに至れり。後神佛合併教院設置の許可を得先づ大教院成る。

明治五年渡歐して其宗教の狀態を視察せる眞宗西本願寺の僧島地默雷師歸朝するや、熱心に神佛二道の分離説を唱へ、書を教部省に致す。依りて政府遂に之を許し明治八年五月神佛合併院たる大教院を廢し、各宗教院を建つることゝなり、神道家は朝廷の祭祀より離れて己が教派を組織することを命ぜらる。茲に熱心なる神道の復興運動も唯數年間權勢を振ひたるのみにて消えたり。先に佛家は三條教則以外に佛教の教義を説くことを許されざりしが、七年布達に依り教義交説の許可を得、茲に制度上に佛教の生命初めて復活するを得たり。明治十年終に教部省を廢してその事務を内務省社寺局に移す。斯くて、全く神佛分離し佛家興學布教の緒につきたり。後十七年八月政府令して教導職を廢し、神佛二道各宗管長に委任の件定められしより、佛教各宗茲に獨立するに至れり。之より先西洋との交通愈頻繁となり明治六年基督教の禁制解かるゝに至りしかば、基督教の宣教師盛に我邦に入り來り、日本在來の教を排して傳道せんとす。茲に於て佛家漸く布教に勤め來る。明治廿二年憲法發布に依り信教自由の制明かとなれり。斯くて維新の宗教制度の改變はそが歸着に達せり。去れど實際上には如何。佛家

は目前の事變に覺め、神道家儒家は、幕末の氣運に乘じて其氣運が赴く處に運ばれたり。而も神儒兩家に依りては未だ何等宗教的開發を見ず。佛教の信仰も未だ覺醒し來らず。加之西洋の學問入るに及びて一部の佛教學者は佛教の教理を宇宙論的哲學思想と誤解し、以て佛教上に禍を殘せり。國政と開化とは正に新時代に入れるも宗教は然らず。唯漸く準備の觀あるのみ。儒教に至りては次第に唯學問として有識の間に行はれ、又その陰陽道又は周易、余命を存するのみとなり、儒教としては漢學の衰退と共に暫らく人の注意より遠ざけらるゝ樣なりき。

基督教の傳道――翻りて基督教の狀態を見るに、明治六年(西暦一八七三)基督教禁制の撤せらるゝや、西洋文物の輸入と共に新舊兩教の多宗派爭ひて布教に着手し、教育或は慈善事業の下に傳道を開始す。之より先、安政五年五國條約確定の翌年、北米傳道會社派遣のブラオンとヘボン神奈川に、フルベッキ長崎にまたウィリヤムス大阪に居住し教育等の事業に從ひつゝ、明治初年基督教傳道の困難を侵し後年宣教の素地を作る。爾來新教宣教師の數漸く增加せり。羅馬舊教も五國條約成りし以來佛國宣教師等內地に布教を始め、明治五年には既に東京に傳道を

開き、八年築地に聖堂を建つ。露西亞の希臘舊教(ハリスト正教會)は安政六年函館に露國領事館建設と同時に館內に聖堂建てられし以來其基礎を置き、修道士ニコライ來りて數年の後明治元年頃より函館を根據として傳道の端を開く。明治五六年頃に至れば英、米、佛新舊兩教の宣教師諸方に傳道を試みつゝあり。中村正直、福澤諭吉氏等信教の自由を說く。

新教の傳道亦漸く興り來る。ブラオンが橫濱に創めし、プラオン學校は有爲の傳道者を出す。熊本藩立の洋學校建てられ米國大尉ヂエンスを聘し、洋學研究せられけるが學生中多くの熱心なる基督教徒を出し、學校閉鎖後是等の青年信徒は宗教的熱心を以て父兄鄕黨武士的思想に反抗し、其多數京都の同志社に入る。同志社は米國に十年間神學を修めて歸朝せる新島襄氏に依りて明治八年に創められたる處、是等の青年は氏の感化を得たり。札幌農學校に博士のクラーク來りて以來其化亦有爲の徒を出す。弘前東奧義塾にも基督教の訓育行はる。又東京小石川に中村正直氏の同人社あり。以上の基督教傳布の中橫濱に興れる一團は日本基督教派の源流となり、熊本に發せるは組合派の、又弘前に於けるはメソヂス

ト派の源流となる。明治十九年東京に明治學院次で青山學院も建つ。是等新教徒の運動と並びて舊教派は下層社會に傳道を進めたり。明治の初年に於て基督教徒が傳道の開拓に當りて、我國人の爲めに西洋文明に手引となれる教育上の功大なり。

斯く基督教は一時その傳道の勢極めて急進せり。然るに維新後の歐化主義絶頂に達したる反動として國粹論の勃興するあり、又神學思想上の動搖等よりして基督教の傳道は明治廿三年頃一頓挫を來しぬ。普及福音教會派、ユニテリアン派等新神學を唱道し、組合派中之に呼應するもの生ず。又これに續きて一時基督教主義の教育に對し國民教育上よりの問題起りぬ。後明治廿八年に至り、組合派は外國傳道會社の補助より離るゝに至れり。

歐化的傾向の反動と國民的自覺——維新後の歐化主義旺盛にして理科學的文化と共にルッソー(Rousseau)ミル(Mill)及びベンザム(Bentham)等の思想を悉く沒批判的に輸入せり。基督教傳道の急進せるも一部分は歐化的傾向の爲めなりき。歐化思想其極に達したる結果は茲に國民的自覺起り來れり。去れど其來るや思想上の問題に明かなる知識を有せざりき。即ち十八世紀の終らんとする頃條約改正問題と共に反動は起れり。而して宗教界に外教反對の運動として現はれ、佛家先づ唱導して神儒家等の保守主義者之に和しぬ。而して再び國民宗教の建設は求められ、こは今や神儒佛三教の統一的大道にありとせらる。此外教反對の思想に於て亦西洋哲學を學べる佛教學者はレナン(Renan)やスペンサー(Spencer)の學說を以て基督教と戰へり。この反動的なる而もその意味の充分なる理解を缺ける思潮に尋て明治の文運正に其緒に就かんとする時、國民的觀念の自覺促さる。即ち皇祖の崇拜に基づける國民道德に就きて最も明かに國民的觀念を示せる教育勅語明治廿三年に下る。

宗教的覺醒の氣運——後、明治廿七八年、日清の役(西暦一八九四—一八九五)に依りて眞に國民的自覺生じ。武士的國民性煥發せり。然るに此戰を經て我國民の心は一般に人生に氣附き來れり。而して父祖傳來の道德に滿足を求め得ず、亦哲學說も元より衷心自覺せんとする狀態の要求には應せずトルストイ(Tolstoi)ニーチェ(Nietzsche)乃至レオパルディー(Leopardi)等我思想界に渴仰せらる而も時代の

趨向は著るしく人生上の自覺起り來り、國民一般に益、內心の苦悶を感じ來らんとす。佛教徒の多くが最も苦みぬ。維新の當時、國家の祭祀、大教の宣布に殆ど貢献し得ざりし神道家は今や眞の宗教問題の發起に會して、自家が分け與りたる問題の上より、國家の祭祀とはむしろ關係多からざる所謂新神道を成し或は復興せり。古來の神道の思想を承げるよりそが神は現世の守護者たり。

斯くして最も著るしく青年間に宗教的要求起り人生上の眞摯なる苦悶と懷疑とを以て進みけるが、如上の道德上宗教上の變動、恰も十九世紀より廿世紀への過渡をなし、而して此精神的苦悶の半ばに明治三十七八年、日露の大戰(西曆一九〇四—一九〇五)起れり。空前の大捷を經て更に著るしく人生が國民一般の問題となり來り、遂に極めて敬虔なる信仰勃興するに至れり。國家の大事に遭遇して起り來れる國民的信仰も宗教的自覺に至りて初めて其歸趣を見出し得たり。さて如上の宗教的自覺に於て各人が宗教的安立の地を認め出でたる處、一方には古來の佛教特に其淨土他力の信仰に新なる光を認め、他方に基督教界に於ても亦在來の基督教に對するに新なる問題を以て向ひ、全く自家の立場より復活の

光を認め來り、且つ其求道的精神の醇なりしものは遂に佛教の他力信仰に稀有の信境を認めたるあり。斯くて佛教は數百年の後新なる光を發揮し、鎌倉時代に獲られたる實驗的信仰茲に復た宣傳せられ、基督教亦我國に於て新に實驗せらるゝありて、此間亦既にわが國民信仰の問題の解決現はれたり。今や宗教界の大勢は西洋の科學的文明の影響等に依りて生ぜる合理的思想より復古的と化せり。如上の宗教的覺醒の氣運は新時代の源頭に於て國民が人生に氣附き來れる問題の中心の思想が赴けるところなり。而して此信仰主義の思潮と共に興り來る一方の道德主義乃至哲學的思想に赴ける思潮は、後學術的討究を重ねて止まざの急迫せる新思想、新主義の勃興する端にして、此眞理、新人生觀を求めて止まざる思潮の大勢は一種の人道主義として信仰主義と共に思想界の二大潮流をなし行くなり。

斯くて明治の宗教は遂に學問界の論爭を排して高潮に達するに至り、佛教はその醇乎たる信仰益勃興し來れり。基督教亦わが國に於て偉大なる宗教的人格によりて更に一新なるわが國民の實驗を經、其信仰を實現し來らば世界の宗教問題

も將に我思想界に集注すべし。わが國に於ける基督教の變遷、發達及び其問題等に就きてはこゝに叙述する能はざるが故に、上に唯明治初年に至るまでのその傳道狀態の一端を記せるに止まる。

現在の各教派——新時代の宗教の一瞥を終るに當り、最後に現今わが國に存する各宗教の教派の數を觀留かん。

神道の各派

神道　大社教　扶桑教　大成教　實行教　黑住教　修成派　神習教　御嶽教　觀教　神理教　金光教

佛教の諸宗派

天台宗——天台宗　寺門派　眞盛派　大覺寺派　醍醐派　新義眞言智山派　仝豐山派　眞言律宗

眞言宗——眞言宗　御室派　高野派

淨土宗——淨土宗　西山派

臨濟宗——天龍寺派　相國寺派　建仁寺派　南禪寺派　妙心寺派　建長寺派　東福寺派　大德寺派　圓覺寺派　永源寺派

曹洞宗——曹洞宗

黃檗宗——黃檗宗

眞宗——本願寺派　大谷派　高田派　興正寺派　佛光寺派　木邊派　出雲路派　山元派　毓照寺派　三門徒派

日蓮宗——日蓮宗　富士派　顯本法華宗　本門宗　本門法華宗　法華宗　本妙法華宗　不受不施派　不受不施講門派

融通念佛宗——融通念佛宗

時宗——時宗

法相宗——法相宗

華嚴宗　華嚴宗

基督教の各教派

舊教

天主公教（ローマンカソリック教）　ハリスト正教會（ギリシア教）

新教

日本基督教會　組合教會　日本聖公會　浸禮教會　美以監督教會　南美以教會　日本美以教會　美普教會　福音教會　同盟教會　同胞教會　普及福音教會　宇宙神教　友會　基督教會　クリスチャン　ヘブチベ教會　セヴンスデー・アドヴェンスト　福音路惕　救世軍布美教會　ラッターデー・セインド基督教會　公同教會　ゼ・リフォームド・プロテスタント・チャーチ・オブ・イングランド

世界の宗教 終

明治四十三年三月六日印刷
明治四十三年三月十日發行

世界の宗教
非賣品
（第二十回配布分）

著作權所有

編輯兼發行者　大日本文明協會
右代表者　磯部保次　東京市京橋區南鍋町壹丁目貳番地
印刷者　佐久間衡治　東京市京橋區四紺屋町廿六七番地
印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區四紺屋町廿六七番地

發行所　東京市京橋區南鍋町壹丁目貳番地
大日本文明協會
電話新橋（二五八四四三六九六二〇九）
振替貯金口座一三七〇〇

大日本文明協會役員

伯爵 大隈重信

本會會長

本會評議員（イロハ順）

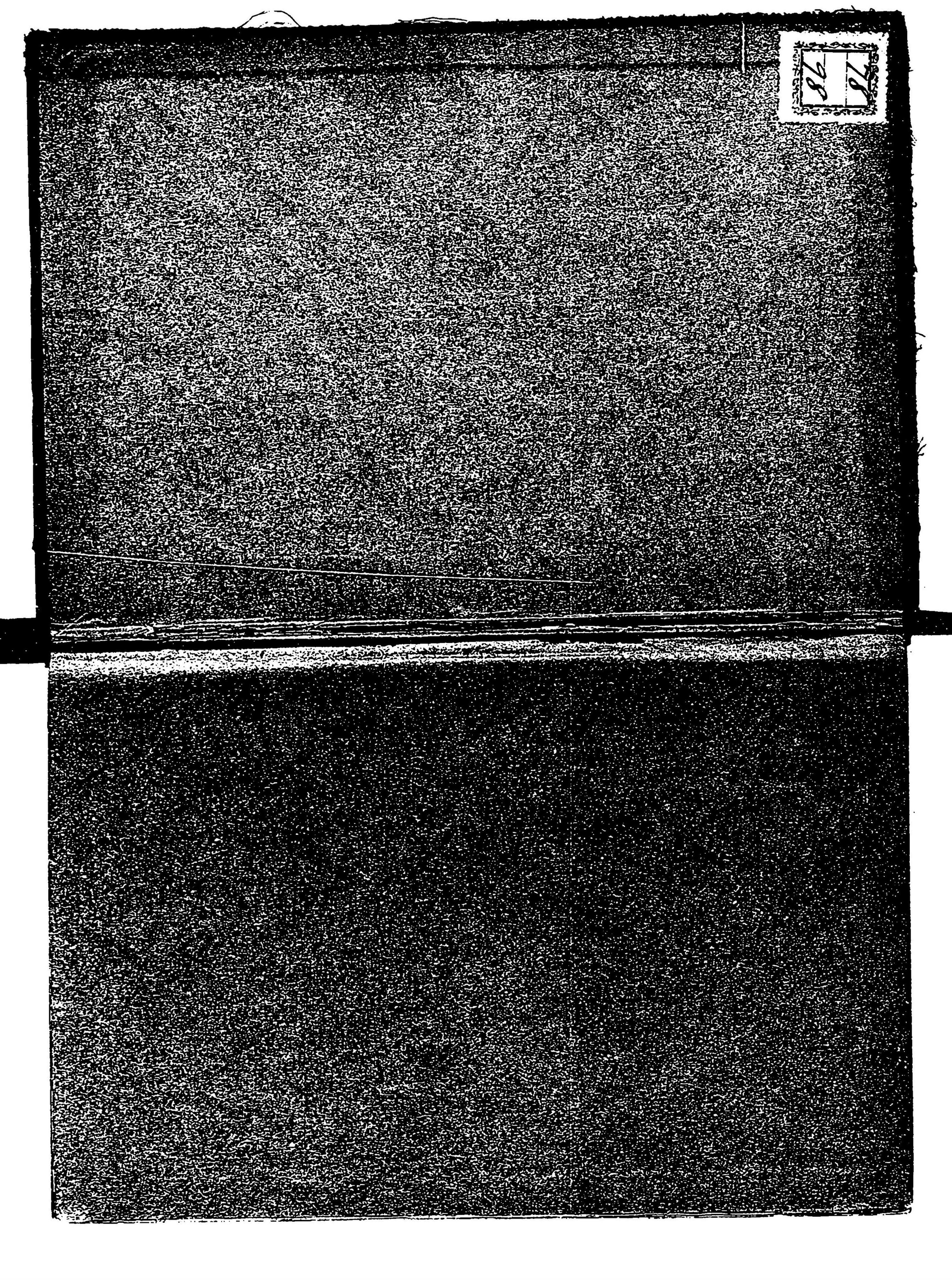
東京帝國大學文科大學教授	文學博士	井上哲次郎
東京帝國大學農科大學教授	理學博士	石川千代松
東京帝國大學農科大學教授	法學博士	和田垣謙三
東京高等師範學校校長		嘉納治五郎
早稻田大學學長	法學博士	高田早苗
早稻田大學教授	文學博士	坪內雄藏
東京帝國大學文科大學教授	文學博士	上田萬年
早稻田大學教授	法學博士	浮田和民
東京帝國大學農科大學學長	理學博士	松井直吉
東京帝國大學工科大學教授、實業學務局長	工學博士	眞野文二
「日本及日本人」主幹	文學博士	三宅雄二郎
東京帝國大學文科大學教授	文學博士	元良勇次郎

本會編輯長 浮田和民

本會編輯主任 杉山重義

本會理事 江藤哲藏

同 磯部保吉



78
98

013699-000-9

78-98

世界の宗教

大日本文明協会

M43
ABA-0170